

学習院大学所蔵 高松松平家旧蔵書の概要とその伝来経緯 ——華族会館旧蔵書研究の一環として——

坂 田 充

論文要旨

本稿は、学習院大学が所蔵する高松松平家旧蔵書についての調査報告である。まず、学習院大学図書館所蔵図書のなかから、蔵書印などを手がかりにして34部2,905冊を特定し、その目録を作成した。あわせて、関連機関の記録などをもとに、本来それらは最後の高松藩主松平頼聰から華族会館に寄贈されたものであり、後に華族会館が学習院を創立するのにもなって学習院に引き継がれた経緯を明らかにした。

その書籍は伝統的な和漢の典籍から成っており、とくに良質な漢籍を多く含んでいる点に大きな特徴があつて、水戸学の影響を受けて盛んであつた高松藩の学問と蔵書の状況を物語る貴重な資料とすることができる。また、華族会館旧蔵書の一部という観点から考察することによって、明治初年に模索された華族教育の様相を解明する資料ともなり、同時に草創期における学習院の教育・蔵書の様相を物語る重要な書籍でもあることを指摘した。

キーワード【高松藩 高松松平家 華族会館 学習院 蔵書】

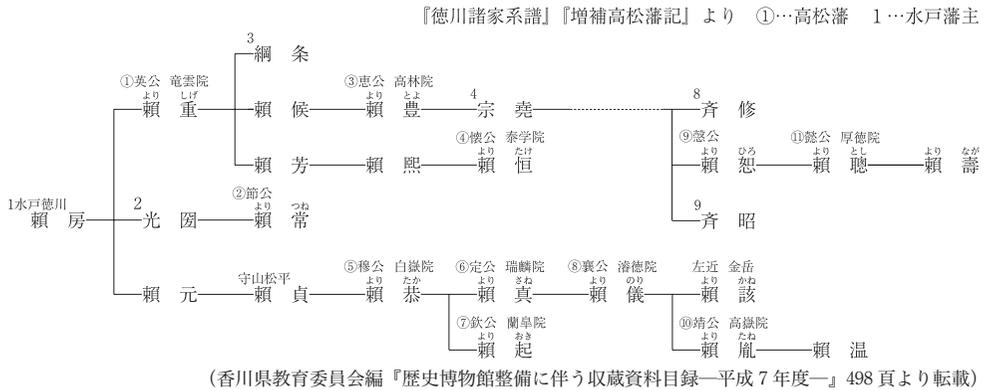
はじめに

高松松平家は、寛永19年(1642)、水戸藩初代藩主徳川頼房の長男頼重よりしげが東讃岐12万石を領有したことに始まり、以来、廃藩置県まで11代229年にわたって続いた家である。初代藩主の頼重よりつねに続いて、第2代頼常よりつね、第9代頼恕よりひろが水戸徳川家から迎えられただけでなく、逆に高松松平家から水戸家の世子に迎えられたこともあつた。高松松平家は、水戸徳川家の支族として、両者の関係は終始深かつた。そのため、高松藩の学問は、水戸学の影響を強く受けて盛んであつた¹⁾。それを物語る蔵書の一部が、現在、学習院大学に所蔵されている。その数、2,905冊。

高松藩および松平家の資料の多くは、関東大震災、東京と高松への空襲に遭つて焼失した。被災を免れて松平家に伝世した資料のほとんどは、現在、香川県歴史博物館に保管されている。その数は、書画・武器武具・調度品なども含めて、5,500点ほどであるという²⁾。したがって、学習院所蔵本は、高松松平家の蔵書を伝える貴重な存在と言えよう。

本稿では、学習院大学が所蔵する高松松平家旧蔵書と、それが学習院の所蔵となるまでの

図1 高松松平家系図



伝来経緯について、調査結果を報告する。

ところで、筆者は先に、同じく学習院大学が所蔵する華族会館旧蔵書を調査し、その目録を作成する過程で、高松松平家旧蔵書が大量に含まれていることに気づいた。この高松松平家旧蔵書は、本来、同家から華族会館に寄贈されたものであり、学習院との関係は間接的であったために、今までその存在に注意が払われてこなかったのであろう。この時の調査の成果は、「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 附解説」³⁾として報告し、解説の中で高松松平家旧蔵書にも言及した。しかし、これは華族会館旧蔵書の調査に主眼を置いたものであるから、高松松平家旧蔵書の発見は言わば副産物にすぎず、その理解も不十分なものとならざるをえなかった。本稿は、先の調査報告の誤りを正し、その不足を補うものである。

学習院に伝わる高松松平家旧蔵書は、現在までに把握された華族会館旧蔵書のうち、書目数でも1割余り、冊数では4割以上を占めている。したがってその調査は、華族会館旧蔵書の構造を明らかにするという意味も併せ持っていることになる。華族会館の蔵書構成を解明することによって、明治初年に模索された華族教育の様相、華族という特権階層の知の有り様にアプローチする重要な資料が得られることも期待できよう。

まずは高松松平家旧蔵書の概要を紹介し、次いでその伝来経緯の検討、華族会館旧蔵書研究の展望へと論を進めることにしよう。

一 学習院大学所蔵高松松平家旧蔵書の概要

本節では、学習院所蔵本を高松松平家旧蔵書と判定した根拠を示すとともに、それによって把握された書籍の概要について紹介する。

1 判定の根拠

(1) 高松松平家から華族会館への寄贈の記録

学習院所蔵図書の中から高松松平家旧蔵書を見出すにあたっては、直接と間接と2種類の手がかりを利用した。直接の根拠となるのは、各書籍に押捺されている蔵書印であり、間接的な手がかりとなったのは、高松松平家から華族会館へ書籍が寄贈されたときの記録である。蔵書印については次項で説明することにして、まずは書籍寄贈の記録を押さえておきたい。

現在の学習院に伝わる高松松平家旧蔵書は、当初、明治8年(1875)に同家から一括して華族会館に寄贈されたものである。そして、そのときの記録が華族会館の史料である『華族会館誌』に残っており、具体的な書目と数量が判明する⁴⁾。これをもとに作成したのが表1【松平頼聰寄贈書目と学習院における現存状況】で、本表の「寄贈書目」と「寄贈数量」がその記載である。その数は、総計35部3,051冊にのぼる。そして、その書目・数量のほとんどが、学習院に伝わる華族会館旧蔵書と一致するわけである。

そこで次に、蔵書印による旧蔵者の確定に移ろう。

(2) 高松藩の蔵書印

高松松平家旧蔵書と判定される最大の根拠は、第11代藩主松平頼聰^{よりとし}の蔵書印、および高松藩の文庫・藩校の蔵書印が押捺されていることである。本稿末尾に図2【学習院所蔵本に見える高松藩関連の蔵書印】として掲げたいうち、1～8がその蔵書印である。また、それぞれの蔵書印のデータについては、表6【学習院所蔵本に見える高松藩関連の蔵書印とその押印状況】にまとめてあるので、併せてご覧いただきたい。

このうち1は、最後の高松藩主となった松平頼聰の蔵書印である。この印は学習院本の性質と伝来経緯を考えるうえで最も重要であり、それについて詳しくは後述する。

2～4の印は、高松城三の丸にあった藩主の居館、披雲閣の蔵書印である。明治4年(1871)の廃藩置県以後、高松城は維新政府の陸軍駐屯地となり、披雲閣も破却されたが、同23年(1890)に城跡が松平家に払い下げられるにおよび、大正6年(1917)披雲閣も再建され、ここで松平家の蔵書が披雲閣図書館として公開された⁵⁾。これも後述することだが、学習院に伝わる書籍が松平家の手を離れたのは明治8年(1875)、すなわち披雲閣が再建される以前のことであり、したがって、学習院所蔵本に見える3種の印は、いずれも廃藩置県以前、高松藩時代のものと考えてよいであろう。

5・6は、高松藩の藩校、講道館の蔵書印。講道館は、第6代藩主松平頼真^{よりさね}の命によって、安永9年(1780)に落成・開業した。明治に至るまで儒学による藩士の教育が行われており、当然そのための蔵書を備えていた⁶⁾。

7・8は、高松藩の史局、考信閣の蔵書印。考信閣は、水戸藩の『大日本史』に続く国史『歴朝要記』を編纂するべく、天保6年(1835)、第9代藩主頼恕によって城内西の丸に建設

表 1 松平頼聰寄贈書目と学習院大学における現存状況

	寄贈書目	寄贈数量	現存冊数	架蔵番号
1	欽定四経 (唐本)	10 帙 87 卷	87 冊	113/7
2	三礼義疏 (唐本)	16 帙 127 卷	127 冊	113/60
3	五礼通考 (唐本)	12 帙 120 卷	100 冊	113/63・65
4	読礼通考 (唐本)	34 卷	34 冊	113/64
5	宋書 (唐本)	45 卷	45 冊	423/19
6	晋書 (唐本)	53 卷	52 冊	423/16
7	南齊書 (唐本)	21 卷	21 冊	423/23
8	梁書 (唐本)	15 卷	6 冊	423/21
9	陳書 (唐本)	13 卷	13 冊	423/24
10	二十一史文鈔 (唐本)	10 帙 100 卷	100 冊	422/3
11	太平御覧 (写本)	30 帙 300 卷	300 冊	030/55
12	冊府元龜 (唐本)	240 卷	240 冊	030/42
13	文苑英華 (唐本)	101 卷	101 冊	303/2
14	津逮秘書 (唐本)	240 卷	240 冊	040/36
15	杜氏通典 (唐本)	40 卷	40 冊	255/5
16	玉海 (唐本)	12 帙 120 卷	120 冊	030/6
17	山堂肆考 (唐本)	80 卷	80 冊	030/45
18	三才図会 (唐本)	8 帙 80 卷	80 冊	030/44
19	白孔六帖 (唐本)	5 帙 40 卷	40 冊	030/68
20	性理大全 (唐本)	40 卷	40 冊	115/2
21	南巡盛典 (唐本)	8 帙 48 卷	48 冊	255/2
22	万寿盛典 (唐本)	6 帙 44 卷	44 冊	255/1
23	御定歴代賦彙 (唐本)	8 帙 50 卷	50 冊	303/3
24	歴代詩余 (唐本)	4 帙 32 卷	32 冊	303/4
25	蔵書十三種 (唐本)	8 帙 80 卷	0 冊	—
26	古楽苑衍録 (唐本)	40 卷	40 冊	301/66
27	登壇必究 (唐本)	70 卷	40 冊	680/32
28	林子全集 (唐本)	32 卷	32 冊	116/7
29	林子全集 (唐本)	4 卷	0 冊	—
30	水経注 (唐本)	1 帙 12 卷	12 冊	467/5
31	水経注积地 (唐本)	2 帙 16 卷	16 冊	467/6
32	万姓統譜 (和本)	50 卷	50 冊	030/76
33	公卿補任 (和本)	55 卷	55 冊	292/1
34	東鑑 (和本)	25 卷	25 冊	409/11
35	群書類従 (和本、欠本あり)	597 卷	595 冊	040/1

計 3,051 卷 計 2,905 冊

※寄贈書目・寄贈数量は『華族会館誌』明治 8 年 5 月 23 日条による。

された。史書編纂を目的として設置された施設であるから、その作業に必要な各種の書籍が集積された。この印については由来が伝わっていて、天保7年(1836)、高松藩家老寛速見の命により十河存樵が銅印大小2顆を作ったという⁷⁾。現在、その実物が香川県歴史博物館に保管されている⁸⁾。

以上8種の印が、高松松平家旧蔵書と判定した直接の根拠である。

2 成果の概要と蔵書の現状

(1) 学習院における蔵書の現状

ここでは、前記の方法に基づいて確定した高松松平家旧蔵書について、その特徴や学習院における現状を説明する。

高松松平家旧蔵書のうち、現在までの調査によって学習院で所蔵が確認されたのは、本稿末尾の表5【学習院大学所蔵 高松松平家旧蔵書目録】に載せる、34部2,905冊である。寄贈冊数の3,051冊に対して、伝存率は95%を超える。丸ごと発見できなかったのは2部のみで、それ以外はほぼ完全な状態で現存していることが確認された⁹⁾。

書籍の所蔵場所は、すべて学習院大学図書館である。ただし、図書館本館ではなく、東1号館書庫に収蔵されている。その理由は、書籍に付けられた架蔵番号と関係している。目録に載せた架蔵番号のうち、前半の3桁の数字は、学習院で大正11年(1922)から使われた分類番号である¹⁰⁾。この番号は、現行の十進分類法と異なるため、学習院の内部では「旧分類」と呼ばれ、その図書も「旧分類図書」と称されている。この旧分類図書は膨大な数にのぼっており、新分類図書との混乱を避けるためと、収蔵スペースの関係という理由から、一括して東1号館書庫に収蔵されている。書庫内ではすべて番号順に配架されており、高松松平家旧蔵書としてはもちろん、華族会館旧蔵書としてもコレクション化されていない。

なお、寄贈記録に見える書目のうち、現在までに1冊も発見できていないのは、『蔵書十三種』80巻、および『林子全集』4巻の2点である。学習院内における蔵書の移動事例として、書籍の分類変更にもなって図書館内で配架場所が変更されている場合¹¹⁾や、図書館の所蔵から外されて学科等に移管されているケース¹²⁾がある。けれども、未発見の2点については、昭和4-5年(1929-30)に編集された『学習院図書館和漢図書目録』にも見えないので、すでにその時点で完全に散逸していたものと考えられ、今後も学習院の内部で発見されることは期待できないであろう。

書籍の特徴についても、簡単に触れておこう。学習院所蔵本の最大の特徴は、目録に見るとおり、古典籍、とくに漢籍が圧倒的に多い点にある。和書は、No.8『群書類従』、No.20『公卿補任』、No.25『吾妻鏡』の3点のみで、全体の1割にも満たない。さらに、その漢籍の質がきわめて高いことも特筆される。たとえば、No.15の『性理大全書』は明版と考えられるが、ほかにも明版と思しきものがいくつかある。これらは、高松藩が相当な力を入れて

漢籍の蒐集を行っていたことを示していよう。それらの漢籍としての価値については、学習院大学東洋文化研究所によって調査が進められているので、その成果を待ちたい¹³⁾。

書籍の内容で見ると、目録冒頭を占めているとおり、類書が充実していることも特徴として際立っている。そのほかに多い部門は、儒学書と史書である。これには、水戸学の影響を強く受けていた高松藩の学風が反映されているように思われる。

(2) 目録の訂正

以上の成果を踏まえて、前回の目録¹⁴⁾の訂正箇所を記しておく。主な訂正箇所は2カ所である。

1つは、目録のNo.9『津逮秘書』240冊が新たに追加されたこと。これは華族会館旧蔵書としても調査から漏れていたものである。

もう1つは、No.8『群書類従』の冊数を訂正した。前回の目録では667冊すべてを高松松平家旧蔵書としていたが、改めて全冊の蔵書印をチェックした結果、蔵書印から高松松平家の旧蔵と断定できるのは595冊であった。この数字のほうが寄贈記録の「597巻」と比べても整合的であるため、今回の目録ではこれに訂正した。高松藩の蔵書印が捺されていなかった72冊については、寄贈を受けた華族会館のほうで欠巻を補配し、全巻揃いとしたものと推測される。なお、これによる華族会館旧蔵書としての冊数などに変更はない。

以上2点の訂正にともない、華族会館旧蔵書の総計も317部6,509冊（参考まで含めると321部6,533冊）に訂正する。

このほか、単純な誤植の訂正なども行ったが、煩雑になるので省略する。

なお、前回の目録解説において、高松松平家旧蔵書が華族会館の所蔵となった経緯については不明としたが、その後、華族会館の記録類を調査することによって、詳細をつかむことができた。これについては、節を改めて述べることにしよう。

二 高松藩松平家の蔵書とその伝来過程

あらかじめ学習院が所蔵する高松松平家旧蔵書の伝来過程を図式化しておく、《高松藩・松平頼聰→華族会館→学習院》という流れになる。本節では、学習院に所蔵されている高松松平家旧蔵書が、もともとどのようにして同家に集積し、それがどのようにして現在の学習院に伝わったのか、その経緯を明らかにする。

1 高松藩の蔵書と最後の藩主松平頼聰

(1) 蔵書印の押印状況から見た高松藩時代の来歴

最初に問題となるのは、学習院に伝わる書籍が高松藩時代の蔵書の中で占めていた位置に

ついでである。しかし、高松に残っている松平家資料を調査してみた結果、残念ながら学習院所蔵本の来歴を示す史料は見つからず、高松藩における漢籍一般の入手ルートを窺わせるような史料も発見できなかった¹⁵⁾。そこで以下では、蔵書印の押印状況にもとづく分析を中心とし、あわせて香川県歴史博物館が保管している高松松平家旧蔵書との関係についても触れることにしよう。

藩主松平頼聰の印以外で最も多く捺されているのは、披雲閣の蔵書印である。学習院所蔵本での割合で言うと、34部のうち25部、7割以上に及ぶ。披雲閣は藩主の居館であるから、その蔵書は歴代の藩主によって継承されていたのであろう。その意味で、頼聰が寄贈した書籍の多くにこの印が見えるのは自然である。香川県歴史博物館が保管する高松松平家文書のうち、披雲閣の蔵書印があるものは合計28点¹⁶⁾。学習院所蔵本に見える3種の印は、いずれも香川県歴史博物館のものと一致している。ただ、高松藩時代の披雲閣にどれだけの蔵書があったのかは不明であり、学習院本が占めていた位置づけははっきりしない。

披雲閣に次いで多いのが藩校講道館の蔵書印で、34部中8部、およそ4分の1の割合である。香川県歴史博物館に伝わる講道館の蔵書は、蔵版印を含めても合計4点しかない。高松にほとんど残っていない理由として、講道館蔵書のうちのどれくらいかは分からないが、明治33年(1900)に香川県博物館が旧講道館の蔵書を借り入れて図書閲覧所を開設して以来、香川県が保管し、最終的には戦前の香川県立図書館に収蔵されて、そこで昭和20年(1945)の高松空襲により焼失したという経緯が知られる¹⁷⁾。また、大小2種の「講道館」の蔵書印のうち、小型印については、学習院本にしか見えない¹⁸⁾。このような現状を考えると、学習院所蔵本は、講道館の蔵書を伝える貴重な存在と言えよう。学習院に伝わるのは漢籍のみで、その内容は史書、次いで儒学書である。

なお、学習院が所蔵する講道館旧蔵書8部のうち、6部までが披雲閣の蔵書印を併せ持つ。講道館と披雲閣との間で、蔵書の移動があったことになる。移動方向について確証はないが、城下にあった講道館旧蔵書のある部分が香川県立図書館に入って空襲で焼失していることと、披雲閣が藩主の居館であったことなどから、《講道館→披雲閣→松平頼聰》という移動経路を想定するのが自然かと思われる。

考信閣文庫の蔵書については、学習院所蔵本のうち、目録のNo.8『群書類従』とNo.20『公卿補任』の2点にすぎないが、いずれも内容から見て修史作業に活用されたことが想像されよう。香川県歴史博物館には、計34点が伝わっている。高松松平家の資料によると、「披雲閣文庫書籍ハ、考信閣文庫時代ノ書籍ノ外、明治四十年以来買上シ物」とあり、考信閣文庫の蔵書は再建後の披雲閣文庫のもとになったという¹⁹⁾。また、考信閣の蔵書印と、披雲閣・講道館の印が並存しているケースは見あたらないので、その間での蔵書の移動は確認できない。よって、考信閣文庫の蔵書のほとんどは、維新後も一括したかたちで松平家の直接管理下に置かれていたものと推測される。

次に、考信閣に関連するものとして、図2の9「平氏文庫」と10「五松屋文庫」の2つの印を取り上げよう。

前者の「平氏文庫」(方26mm)は、目録のNo.8『群書類従』とNo.20『公卿補任』に捺されている。この印について、草薙金四郎氏は、梶原景惇(1762-1834)のものとしている²⁰⁾。梶原は、号を藍渠らんきよと言ひ、高松城下で蠟問屋を営む豪商榭屋かしわやの生まれ。幼児より学を好み、詩・書画・茶をよくした風流商人で、高松藩による『歴朝要記』の編纂は彼が私撰した稿本150冊を藩に献納したことに始まる²¹⁾。草薙氏は梶原景惇に人物比定した根拠を示していないが、梶原の本姓が「平」であることによるのであろうか²²⁾。学習院所蔵本について言えば、この印は必ず「考信閣文庫」とセットで捺されているので、彼と考信閣との関係やその書目からしても、彼の蔵書印と見ていちおう矛盾はない²³⁾。これを梶原の印と判断してよければ、彼の蔵書が考信閣に入ったことを示しているということになる。高松松平家に伝わる記録には、考信閣の書籍の由来について、梶原平四郎より『薩戒記』ほか228部782冊が献上されたとの記述があるので、これを裏書きするものということにもなる²⁴⁾。

もう一方の「五松屋文庫」(縦74mm×横18mm)は、No.8『群書類従』のうち巻37・113などに限られている。この印についても草薙氏は、中村春野(1773-1837)に比定している。中村は高松の国学者で、印文に見える「五松」は彼の号である。梶原景惇と同じく『歴朝要記』の編纂に携わった人物で、天保6年(1835)に考信閣総裁の一人に任じられている²⁵⁾。やはり、考信閣と直接関わりを持つ中で蔵書が入った例と言える。

そのほか、高松藩との関係が明確にはつかめていない蔵書印を列記しておく。

No.8の『群書類従』は様々な所蔵者の由来を持つ取り合わせ本であるが、巻412に江戸の狂歌師、鹿都部真顔の蔵書印「狂歌堂文庫」が見える。

No.19『通典』の「中原」「職忠」「出納」は、平田職忠もとただの蔵書印。平田家は中原氏の庶流で、蔵人所出納を世襲した家。江戸初期に出た職忠は、有職故実に通じ、後陽成天皇の信を得て院昇殿を許された人物である。水戸学の影響を受けて朝儀復興にも関心を寄せていた高松藩の様子が窺えよう。

No.21『古楽苑』およびNo.24『御選歴代詩餘』に見える「鳥範」「鳥氏子孫永保」「必端堂図書記」は、江戸の蔵書家として著名な小鳥範(字は洪卿、号は必端)の蔵書印。

No.32『水経注』の「読耕齋之家蔵」は、林羅山の四男靖おさむの蔵書印²⁶⁾。林家と高松松平家の関係としては、初代藩主頼重が林鶯峰の高弟岡部拙齋を藩儒に迎え、第2代藩主頼常が同じく林鶯峰の門人七条宗貞に経術を学び、さらに林鳳岡の門人菊地武雅・岡井政之進を藩儒としたことなどが知られている²⁷⁾。この蔵書も、儒学を重んじた高松藩の林家との関係を物語っているのかもしれない。

(2) 松平頼聰とその蔵書印

松平頼聰 (1834-1903) は、天保5年 (1834) に第9代高松藩主頼恕の第8子として生まれ、文久元年 (1861)、第11代にして最後の藩主となった人物である。幕末の激動期に藩政を執り、慶応4年 (1868) の鳥羽・伏見の戦いでは「朝敵」とされるなど、難局に直面した。維新後に華族となり、明治17年 (1884)、伯爵に叙せられ、同36年 (1903)、70歳で没している。

各所に散在している高松藩旧蔵書のうち、学習院所蔵本の最大の特徴は、34部全点に松平頼聰の蔵書印「従四位松平頼聰精力所集」が捺されていることである²⁸⁾。このことは、次項以下で詳しく述べるように、これらの書籍がもともとは頼聰本人から一括して華族会館に寄贈されたものであるという事情と符合している。

印文の「精力所集」という文言との関連で言うと、頼聰自身も寄贈を申し出た書簡 (後掲) のなかで「精力集ル所ノ和漢書籍三千巻」と説明している。ここで問題となるのは、これらの蔵書が、文字通り頼聰のもとで精力的に蒐集されたものなのか、それとも、それ以前から高松藩ないし松平家に伝わるものが多く含まれているのか、ということである。前述したように、頼聰の寄贈書は明版を含むなど、典籍としての質がきわめて高く、「精力所集」の言葉は伊達ではない。頼聰によって蔵書印が捺されるまでに、それらの書籍がどのように集積されたのかを探ることは、高松藩の学問的特質にとどまらず、東アジア世界につながる漢籍蒐集の有り様という問題にまで発展しうる重要な意味を持つであろう。

先に挙げた高松藩の文庫・藩校の蔵書印を持つ書籍には、藩主頼聰の時代以前から藩に伝世したものが存在しているはずであり、いずれも高松藩の学問的・思想的・文化的な伝統を窺わせるものと言える。

しかしその一方で、学習院所蔵本にはそれらの蔵書印が単独で捺されているわけではなく、全点に藩主松平頼聰の蔵書印がある。したがって、頼聰の時代に高松藩の所蔵となった書籍も含まれていよう。また、高松藩関係としては頼聰の蔵書印しか捺されていない書籍もあり、これについては頼聰のもとで蒐集されたものと推測される。すなわち、目録のNo. 16、21、23、24、33の5点である。すべて漢籍であり、明版の可能性のあるものも含まれている。欧米列強の接近という国際環境の激変に対応するべく、高松藩でも洋学の導入が進められた形跡があるけれども²⁹⁾、頼聰の嗜好もまた高松藩の伝統を色濃く受け継いだものであったと言えよう。

ところで、この頼聰の印は、各種の蔵書印譜にも掲載されておらず、ほかに存在がまったく知られていないものである³⁰⁾。したがってこの印は、頼聰が華族会館へ寄贈するのに際してあつらえ、寄贈の対象となった書籍にのみ一括して押印した可能性があろう。頼聰が寄贈を申し出た書面のなかで、印文をなぞるかのようにして「精力集ル所ノ和漢書籍三千巻」と述べているのも、寄贈にあわせて押印が行われたことを示しているのではないだろうか。

この印の年代を推定するうえで唯一の手がかりとなるのは、印文冒頭の「従四位」という文言である。頼聰は嘉永6年（1853）、20歳のときに従四位下に叙されているので³¹⁾、この印はそれ以降に作られたことになる。そして、印文に領地や藩主の地位を連想させる「高松」といった語句ではなく、天皇から与えられた「従四位」という位階を選んでいることから考えると、維新後に作成されたものではないかと思えてくる。そうすると、寄贈が行われた明治8年（1875）に近接するから、やはり寄贈に際しての押印という可能性が高いのではなからうか。

頼聰から華族会館への寄贈については、項を改めて検討することにしよう。

2 松平頼聰から華族会館へ

ここでは松平頼聰から華族会館へ書籍が寄贈された経緯を見ていく。この寄贈は、当時の華族会館の状況や頼聰の脱会問題と絡んで複雑な様相を呈しているため、少し詳しくその事情を探ってみよう。

(1) 華族会館の書籍館建設と松平頼聰の蔵書寄贈

明治8年（1875）3月、松平頼聰は華族会館に書籍の寄贈を申し出る。その書翰の写しが残っているので、まずはこれを掲げよう³²⁾。

書籍館御建設ノ儀、追々御着手相成候趣承り、大ニ賀スル所ニ候。遂ニ盛大ニ至リ候ハ、国家ノ裨益不少、依テ精力集ル所ノ和漢書籍三千卷、聊ナカラ寄附仕度、最其内陳編腐套ニ属スル書モ可有之候得共、是亦考古ノ一証ニモ可相成、何分ノ御評議、庶幾候也。

明治八年三月 松平頼聰

会館御中

寄贈先の華族会館というのは、明治7年（1874）6月1日に創立した華族の同族組織である。創立以前から華族有志の結集は始まっており、すでに頼聰も同年2月10日に同盟（入会）している³³⁾。華族会館は、当初から教育機関としての機能を持ち、のちに華族学校（学習院）の設立母体となる。頼聰が会館に寄贈を申し出たのは、ちょうど「書籍館」（図書館）建設の動きが進み始めていたときのことである。その動きを一気に加速させるきっかけとなったのが、勝安芳（海舟）による徳川宗家（家達）^{いへぎよ}の蔵書および建設費寄附の申し出であった。これについても華族会館の記録を載せておこう³⁴⁾。

客年、御同族御集会、主トシテ書籍館御建設之儀有之候旨、示来。未タ御著手ノ様子不^{（開眼カ）}及、甚遺憾ニ奉存候。何卒、唯今ヨリ其端緒御開相成、先僅々ノ書籍ト雖モ此ニ貯蔵シ、漸次歲月ヲ逐テ各書御購集、終ニ大成ニ至候得ハ、国家ノ裨益モ不少ト、切ニ希望致シ候。若御著手相成候得ハ、聊ナカラ旧主家蔵書千卷并ニ金貳千圓、御瀝立ノ御助勢

トシテ寄附致候乎ト奉存候。何分之御評議、拝承仕度候也。

八年第一月廿一日 勝 安芳

華族会館

書籍 千巻

冊数

漢籍千貳百九本

洋書千八百五拾一本

右、勝安芳ヨリ旧主家徳川家達蔵書ヲ寄附ス

外ニ金貳千圓添

明治八年一月

勝の書面で述べられているように、華族会館のなかで書籍館を設立するという意見はこの前年に固まっていたものの、実際に建設する段階にはなかなか進まなかった。そこでこれを後押しするために、勝は徳川家達の蔵書3千冊と建設費用2千円の寄附を申し出たわけである³⁵⁾。この申し出は会館の華族たちを大いに感激させ、建設の実現に向けての行動を促すこととなった³⁶⁾。また、こうした動きに刺激を受けて、この頃から会館への書籍の寄贈が相次ぐようになる。表2【華族会館への書籍寄贈】を見ていただければ、その状況が分かるであろう。要するに、松平頼聰による書籍寄贈の申し出も、そうした華族による書籍館設立に向けての寄贈の一例であった。

(2) 創立当初における華族会館の動揺と松平頼聰の脱盟問題

以上のように、頼聰の寄贈願いを見る限り、その申し出は書籍館の開館に向けての純粋な書籍寄贈としか見えない。ところが、この申し出について、『華族会館誌』明治8年3月4日条には次のように記されている。

松平頼聰、和漢書籍三千巻ヲ寄附センコトヲ請ヒ、并ニ宿痾アルヲ以テ会館出席ヲ自由ニ任センコトヲ申稟ス。

これによると頼聰は、書籍の寄贈を申し出ると同時に、持病を理由にして華族会館への出席を自由にまかせてほしいと願っている。これは会館からの脱退を申し出たに等しい。ここには、書籍の寄贈を言わば手切れ金のようにして、会館との関係から身を引こうとの意図が窺われる。実際、この申し出の直後に頼聰の脱盟（退会）問題が浮上しており、書籍の寄贈手続が完了した翌日に除名されたことをもって最終的な決着を見ているのは象徴的である³⁷⁾。そして、この頼聰の脱盟問題の争点は、華族会館への出資金の支払いにあった。

誤解のないように強調しておきたいが、このような脱盟問題は頼聰だけの特殊例外的なケースであったわけではない。当時、華族会館の内部はその方向性をめぐって分裂状態に陥っ

表2 華族会館への書籍寄贈（明治11年まで）

年月日	寄贈者	書目	数量	備考	
明治7年（1874）	2月	山内豊誠	万国全図	1冊	
	6月1日	徳川昭武	大日本史	2部（200冊）	同日、華族会館が創立
	7月20日	五條為栄	類聚国史	1部（30冊）	
	7月	醍醐忠順	臣軌	1冊（2冊イ）	7月30日条の後に記載
			泰西国法論	4冊	
			勸善訓蒙	3冊	
10月	醍醐忠順	会議弁	1冊		
11月13日	竹腰正美	十三経注疏	1部（161冊）		
明治8年（1875）	1月	堀田正養	康熙字典	1部（41冊）	
	2月17日	本荘宗武	（二十一史のうち漢書以下）	395巻（394冊イ）	
	2月25日	土方雄志	（各種洋書）	30冊	
	3月12日	土岐頼知	資治通鑑	1部148巻	
	3月14日	醍醐忠敬	律書訓解	3巻	
	3月21日	五條為栄	官員儀式録（洋書）	1部	
	3月24日	本田忠実	延喜式	1部50巻	
			仏蘭西民法	16巻	
			仏蘭西憲法	1巻	
			仏蘭西訴訟法	8巻	
			仏蘭西刑法	5巻	
	3月30日	毛利元敏	（英国小文典・地理書・洋算書・小英国歴史・小万国歴史など洋書）	8部	
	4月14日	河鱈実文	欧羅巴洲全図	1幅	
		尾崎三郎	英国成文憲法纂要	1部（2冊）	自著
	4月20日	竹腰正美	日本外史	1部（12冊）	
			西洋事情	1部（10冊）	
	5月12日	京極高德	六国史	1部85巻	
	5月23日	松平頼聰	欽定四経（唐本）	10帙87巻	総計35部3,051巻。寄贈の申し出は3月4日。
			三礼義疏（唐本）	16帙127巻	
			五礼通考（唐本）	12帙120巻	
			読礼通考（唐本）	34巻	
			宋書（唐本）	45巻	
			晋書（唐本）	53巻	
			南齊書（唐本）	21巻	
			梁書（唐本）	15巻	
			陳書（唐本）	13巻	
二十一史文鈔（唐本）			10帙100巻		
太平御覧（写本）			30帙300巻		
冊府元龜（唐本）			240巻		
文苑英華（唐本）			101巻		
津逮秘書（唐本）			240巻		
杜氏通典（唐本）			40巻		
玉海（唐本）			12帙120巻		
山堂肆考（唐本）			80巻		
三才図会（唐本）			8帙80巻		
白孔六帖（唐本）			5帙40巻		
性理大全（唐本）			40巻		
南巡盛典（唐本）			8帙48巻		
万寿盛典（唐本）			6帙44巻		
御定歴代賦彙（唐本）			8帙50巻		
歴代詩余（唐本）			4帙32巻		
蔵書十三種（唐本）			8帙80巻		
古楽苑衍録（唐本）			40巻		
登壇必究（唐本）			70巻		

		林子全集 (唐本)	32 卷		
		林子全集 (唐本)	4 卷		
		水経注 (唐本)	1 帙 12 卷		
		水経注釈地 (唐本)	2 帙 16 卷		
		万姓統譜 (和本)	50 卷		
		公卿補任 (和本)	55 卷		
		東鑑 (和本)	25 卷		
		群書類従 (和本、欠本あり)	597 卷		
	7月10日	徳川家達 (参議 勝安芳の仲介)	(旧主徳川氏蔵書漢籍 44部・洋書 624部)	3,140 卷 1月の申し出では、漢籍 1,209冊・洋書 1,851冊。脚註参照。	
	7月11日	武者小路実世	資治通鑑綱目 (唐本)	1部 (120冊)	
	9月24日	榊原政敬	(修身学)	50部 「米人准蘭徳著修身学訳書」	
	12月26日	水野忠順	淵鑑類函 朱子語類 史記評林 綱鑑易知録	1部 200冊 1部 36冊 1部 50冊 1部 55冊	
明治9年 (1876)	1月5日	副幹事鍋島直彬	日本書紀 古事記伝	1部 1部	
		大原重実	亜細亜全図	1巻	
	2月	竹腰正美	愈大猷正気堂集	12冊	
			三朝実録採要	8冊	
			新策定本	5冊	
			唐土歴代沿革地図 清二京十八省輿地全図	1帖 1帖	
	3月17日	渡部章綱	英仏和会话初篇 英仏通語	500部 50部	「勉学所童蒙初学ノ用ニ供セン」
	5月22日	東久世通禧	公卿補任	45冊	「本館華族統譜編纂ノ挙アルヲ以テ其参照ノ便ニ供スル」
			諸家伝	45冊	
	6月13日	中山忠能 松平慶永 嵯峨実愛 大原重徳 伊達宗城 池田慶徳 毛利元徳 正親町公董 五條為栄 秋月種樹 川崎実文	皇朝史略	4部	中山忠能以下 11名の連名による寄贈か。寄贈の日時はこれより以前。
			十八史略	8部	
			泰西史鑑	4部	
			日本外史	4部	
輿地史略			3部		
元明史略			3部		
物理全志			4部		
清鑑易知録			4部		
通鑑攬要			4部		
日本地誌略			4部		
聯邦史略			4部		
9月26日	華園拱信	西洋易知録	4部		
		西史綱鑑 万国新史	4部 4部		
明治10年 (1877)	2月16日	戸田忠行	大日本史	1部	
	4月23日	佐竹義脩	正増続大広益会玉篇大全	30部 佐竹義脩蔵版本	
	5月11日	府下平民馬杉繫	続日本外史	10部	
	6月5日	東京日本橋書肆 稲田佐兵衛	万国新史	3部 (1部 18冊)	
			泰西史鑑	3部 (1部 22冊)	
			立憲政体	3部 (1部 6冊)	
輿地新図 新訂日本図			1幅・附録 1冊 1幅		

	6月6日	松平直方	校刻日本外史	10部	
	6月8日	学校事務係宮脇通赫	続十八史略読本	1部	
	9月14日	永井尚服	語格全図	50部	
	10月30日	宮脇通赫	大日本分国輿地全図		「学習院」に寄付
	11月15日	山梨県甲府常盤町書肆内藤伝右衛門	(筆算教授書)	2部	
	12月5日	有栖川親王	政法掲要	50部	「会館及ヒ学習院ニ賜フ」
明治11年(1878)	2月22日	茨城県士族加藤熙	一騎歌尽	1部	自著
			天地人歌尽	1部	自著
			衆教論略	(第一二巻)	以上3種「学習院」に寄付
	7月5日	部長局	華族明鑑	4部	部長局編纂、会館に寄贈
	7月11日	学習院長立花種恭	仏英独三語便覧	1部	学習院に寄付
	7月12日	学習院教師堤正勝	国史要略		自著、学習院に寄付
	9月20日	柳原前光	皇位継承篇	1部	

※『華族会館誌』の記事を中心に、国立公文書館(内閣文庫)所蔵『岩倉具視関係文書』岩倉文書75・華族会館書類5(請求番号265-286)所収の「書籍寄附人名 書籍局」で適宜情報を補った。

註) 書籍館の建設の援助として、勝安芳(海舟)が仲介となり、徳川家達の蔵書と金2千円の寄付を申し出て実現(1月24日条参照)。書目は不明。ただし、のちの明治13年2月21日条で、徳川家達が「該家由緒アル書籍」として「皇朝戦略編15冊、古今鍛冶備考7冊、名節録3冊、文選六臣註31冊、唐文粹24冊、文章達徳録6冊、王白田集12冊、韓文起10冊、文章正宗23冊、白氏全集25冊」の10部を返還させている。『海舟日記』にも関連記事あり。

ており、除名を申し出る会員が続出して瓦解の危機に直面していた³⁸⁾。その根底に、出資金の負担という問題が横たわっていたのである。

華族会館の会員が負担する出資金には、同盟時に支払う「資本金」と毎年の「保続金」の2種類があり、とりわけ高額だった資本金の納入は滞っていたようである³⁹⁾。ところが、勝海舟(徳川家達)からの寄附の申し出をきっかけとして書籍館の建設が動き出し、その費用として会員資本金の1/4の徴収が決定されると⁴⁰⁾、その直後、出資金の負担を理由とする会員の除名申請が問題化した。たとえば、松平頼聰による申し出の直前、土井忠直が経済的事実を理由に除名を願い出ている。土井は、会館を脱盟することによって、それまで納めていた保続金を、自身の旧領地である刈谷県の小学校費用に回したい意向であった。会館は、ほかの会員の去就に影響が及ぶことを恐れて、これを認めなかった⁴¹⁾。松平頼聰の申し出は、その数日後のことである。

頼聰が申し出を行った2日後、華族会館の集会があり、書籍館建設費用として資本金の1/4を募集することが会員に報告された。その席上、副議長壬生基修^{もとなが}は次のように通告し、会員一同の賛意を得ている⁴²⁾。

本館設立ノ経費及ヒ書籍局資本金ハ、同盟諸氏、必ス之ヲ其初メニ出スヘキ所ナリ。然ルニ、酌量スル所アツテ、暫ク其納期ヲ緩フス。今ヤ、同盟中除名ヲ請フ者、其初約ニ

背キ、出金セスシテ去ル、是レ甚タ理ナシ。自今、除名ヲ請フ者アラハ、必ス資本金ヲ出シテ退ク可シ。

頼聰が出資金の支払いをめぐる脱盟を明言した日時ははっきりしないが、『華族会館誌』明治8年3月28日条には、「是ヨリ先キ、松平頼聰、私学設立ノ目途アルヲ以テ、会館同盟ヲ脱センコトヲ請フ」とある。この時点で、最初は病気としていた理由が私学設立に変わっており、当然その費用に会館出資金を充てたいとの意味である。これに対しては、副館長醍醐忠順ただおきが「会館創立ノ重義務ヲ捨テ、私学開設ノ軽事業ヲ取ルハ、軽重取捨ノ当ヲ失ス」と論じたほか、会員各氏も彼の脱盟を認めなかった。だが、頼聰は逆に反発を強め、「今後往復ヲ謝絶シ、断然脱盟、保続金差出サル心得」という書簡を叩き付けるに至った⁴³⁾。書中に「保続金」と見えるが、その後の会館側の記録ではすべて「資本金」の納入が争点となっている⁴⁴⁾。

この一連の流れを見ると、前掲した、除名前には資本金を納入せよという副議長の通告も、頼聰の問題が直接の引き金となっていた可能性が推測される。

頼聰の脱盟問題は、華族会館に大きな波紋を広げた。資本金を納入させた後に除名すればよいという現実的な意見が出されたが、賛成は集まらなかった⁴⁵⁾。その理由は、「頼聰恣マニ脱盟スルハ、盟約ノ信ヲ失シ、交際ノ道ヲ破ル。之ヲ不問ニ措クトキハ、本館規則、此ヨリ敗壞セン」と主張されたように、ほとんどの会員において、脱盟を認めれば会館の秩序が崩壊してしまうとの懸念のほうが強かったからである⁴⁶⁾。相次ぐ除名申請に揺れていた当時の華族会館において、会員たちの危機感は切実であった。

その後、頼聰が態度を軟化させて会館に謝罪し、先の書簡を取り消したうえで改めて除名を嘆願したことによって、事態は解決に向かう⁴⁷⁾。5月21日の会議で、資本金を納入させたうえで脱盟を認めることがようやく可決された⁴⁸⁾。その2日後、頼聰は、以前に寄贈を申し出ていた書籍を会館に送付する⁴⁹⁾。この間、資本金の納入を済ませたのであろう。翌日、願いのとおり、会館を除名された⁵⁰⁾。

3 華族会館、松平頼聰、そして寄贈書のその後

明治11年(1878)6月、華族会館で選出された議員57名の中に、「松平頼聰」の名前があった⁵¹⁾。除名から3年後のことである。その間、頼聰は会館の記録に姿を見せないが、議員に選出される以前に復帰していることは間違いない。頼聰と華族会館をめぐる状況はどのように推移したのか。また、寄贈された書籍はどうなったのか。それぞれのその後を追ってみよう。

頼聰が会館を脱盟するにあたって理由としていたのは、私学を設立するためというものであった。除名後の頼聰は、まずその実行に着手する。

除名から3カ月余りが経った明治8年(1875)9月、頼聰は東京府に対して本郷の邸内に

私学校を設立することを申請し、許可された。校名を「玉藻^{たまも}学校」という⁵²⁾。高松城（玉藻城）にちなんでの命名である。教員4名（うち外国人教師1名）、生徒61名での出発であった。この学校は短命に終わり、およそ1年半後に廃止されている⁵³⁾が、地元住民たちがその敷地・建物を借り受けて公立「玉藻小学校」が設立された。その校名は、言うまでもなく、頼聰の私学を承けたものである⁵⁴⁾。頼聰は永代無代価でこれを提供したのみならず、明治10年・11年と資金面でも援助を与えている⁵⁵⁾。

ところで、松平頼聰による教育事業への関わりは、本邸のあった東京本郷に限定されていたわけではなく、旧領地の高松に対しても各種の援助を行っていた。一例を挙げれば、維新政府により学制が発布された明治5年（1872）、高松での学校造営費用として、いち早く香川県に1,500円を寄附している⁵⁶⁾。こうした行為は、脱盟問題のところで見た土井忠直の考えと共通する面を持っている。概して旧大名の領地・領民に対する責任感ないし思い入れは廃藩後も根強く、それだけに、華族会館に対してよりも優先的に資金を振り向けたいとの感情があったことは、容易に理解できる。しかし、これを華族会館の側から見れば、会館の同盟秩序からの逸脱と映る場合があったこともまた事実である。かくして、分裂の危機に直面した会館にとっては、いかにして会員の個別利害的な動きを抑え、華族の同族結集を図っていくかが大きな課題となっていたわけである。だからこそ、頼聰の脱盟問題はあれだけ紛糾したのである。

有力な華族の脱盟を引き留められなかったことで、華族会館崩壊の危機はよりいっそう切迫したものと思われる。こうした状況の打開に乗り出し、華族をまとめなおすうえで最も重要な役割を担ったのが、岩倉具視である⁵⁷⁾。岩倉は、王政復古を実現した後、早くから華族を皇室の藩屏、王政の護持者として結集する意図を抱いており、華族会館の創立を後押しした人物である。岩倉の画策により華族の統制が進展していくにつれて、頼聰もまたその流れに巻き込まれていく。

明治8年（1875）10月7日に行われた天皇の臨幸も、岩倉らによる華族会館再建策の一環として理解すべきであろう。会館に臨幸した明治天皇は、華族一同に対して、「此館ニ從事シ、協同勉勵學術ヲ研精シ、其目途ヲ宏遠二期シ、爾ノ履行ヲ端クシ、爾ノ家道ヲ齊へ、能ク名声ヲ保チ、永ク皇室ニ尽ス所アレ」との勅諭を下した。地方在住華族まで含む全華族がこの勅諭を遵奉する旨の誓詞⁵⁸⁾に証印したことにより、華族会館は全華族が天皇の勅諭を奉じて結集する「奉勅の館」となった。さらに、同じ臨幸の席では、右大臣岩倉具視ら3大臣に対して華族の監督を命じる勅語も下されている。また、明治9年（1876）4月18日には、岩倉が華族会館長に就任した。こうして華族会館は、拘束力を持たない私立の団体から、政府最高官に統率される準官立の組織へと、大きく姿を変えたことになる。

要するに、天皇の権威を背景とした政府の権力によって、華族は会館に結集することが義務づけられ、政府は華族会館を通して全華族を一元的に統制することができるようになった

わけである。このような情勢の中で、頼聰も否定なしに会館との関係を再開させていったものと推測される。

岩倉による華族統制との関連で、頼聰の会館復帰を示す史料をもう1つだけ挙げておこう。頼聰の事績をまとめた『高松松平氏歴世年譜』巻14の明治9年10月条に、次のような記事がある。

華族会館ニ族長並ニ幹事ノ選挙アリ。徳川(尾張)従一位慶勝君族長トナリ、公(頼聰)幹事トナル。

一見すると、頼聰が華族会館の幹事に選出されたと誤解しそうになるが、そうではない。参考のため、この2年後の記事も掲げよう⁵⁹⁾。

族長徳川慶勝君辞退。(頼聰)公同族ノ選ヲ以テ之ニ代リ、第五(二十五)類族長トナル。

ここに見える「族長」や「幹事」というのは、岩倉が華族を統括するために創り出した、宗族制という制度の役員である。宗族制では、華族がその祖先によってグルーピングされ、皇別・神別・外別の3つに大別されたのち、血縁によってさらに細かく「類」という単位に整理・体系化された。明治11年(1878)に岩倉の名前で発行された『華族類別録』⁶⁰⁾によると、高松松平家は、皇別第25類・源朝臣「清和天皇皇子常陸太守貞純王子鎮守府將軍経基八代義季十六代太政大臣家康裔」に属しており、徳川宗家・御三家・御三卿らと類を同じくしている。こうした「類」は「宗族」とも称し、各宗族を束ねる役員として族長(宗族長)と幹事が置かれたのである。この宗族は、これまた岩倉が設置した部長局という宮内省管下の華族統轄機関の下に置かれることによって、政府による華族統制の単位ともなっていた。本来これらは華族会館の役職ではないのだが、頼聰の記録に「華族会館ニ……選挙アリ」とあるのは示唆的である。宗族制も華族会館を通して機能していたわけである。

岩倉は、華族統制の中枢機関としての役割を華族会館に担わせることによって、華族の同族結合を強化することに成功した。一方、これを華族の側から見ると、旧大名としての立場などからする単独行動が抑え込まれ、政府による一元的な統制下に吸収されていった過程と見ることもできよう。松平頼聰の会館除名から復帰までの動きは、そのような華族をめぐる状況の変化を端的に物語っているように思われる。

本節の最後に、頼聰が華族会館に寄贈した書籍のその後を説明しておこう。会館が岩倉たちの指導のもとで軌道に乗り出すと、会館の事業として学校設立が日程に上った。明治10年(1877)、華族学校が開校し、天皇から「学習院」の校名が与えられる。こうして会館の教育機能が学習院に移されると、同時にその蔵書の多くも学習院に寄贈された。その数は、和漢書9,159冊、洋書1,614冊にのぼる⁶¹⁾。学習院が所蔵する高松松平家旧蔵書には、すべて華族会館の蔵書印が捺されている。頼聰の寄贈書は、そのほかの華族会館の蔵書とともに学習院に引き継がれたわけである。現在、その書籍は、学習院大学図書館の書架に収まっている。

三 華族会館旧蔵書と高松松平家旧蔵書

本節では、華族会館やその蔵書にとって松平頼聰寄贈書がどのような意味を持っていたのかを考察し、その結果を踏まえたうえで、華族会館旧蔵書研究の意義と課題について展望を述べる。

1 華族会館蔵書における松平頼聰寄贈書の位置づけ

先述したように、松平頼聰による会館への書籍の寄贈は、書籍館建設の準備段階において相次いだ寄贈の1例であった。それでは、華族会館の蔵書にとって、頼聰の寄贈書はどのような意味を持っていたのであろうか。

華族会館による書籍館の建設は、華族子弟の教育を第一の目的としていたから、当然そこに寄贈される書籍もその目的に適ったものが選ばれるはずである。そこで、前掲した表2【華族会館への寄贈書籍】によって、会館に寄贈された書籍がどのようなものであったかを確認してみよう。書目を見て気づくのは、伝統的な和漢の典籍と並んで、欧米を中心とした近代世界に関する新しい書籍が多く寄贈されていることである。洋書の寄贈が4件に及んでいることも注目される。また、寄贈された書目の一覧表からは、一見、中国書が多いような印象を受けるかもしれないが、明治初年には清朝中国との関係が外交上の焦点の1つであったという時代背景を考えれば、そこに欧米の書籍に向けられた関心との共通性を見出すこともできよう。

こうした書籍寄贈の傾向は、当時の会館における教育方針を反映している。たとえば、会館創立の4カ月前に定められた「華族大会館仮規則」⁽²⁾によると、第3章「書籍局」で、同族修学のために和漢洋の書籍を蒐集し閲覧に供する部署として書籍局を置くとされ、その書籍購入費用として、和漢書7千円に対し、西洋書3万3千円という5倍近い金額が見積もられている。第4章「講義局」でも、講義内容として、

- 第一 (国際法) 万国公法
- 第二 (議会) 巴力門之理及ヒ其沿革
- 第三 法律
- 第四 泰西各国政政治乱沿革并風俗ノ変革等
- 第五 宗旨ノ義

の5つが挙げられており、西洋近代の知識を身につけさせることが最重要課題と考えられていたことは明らかである。また、これは実現しなかったものの、第6章「翻訳局」として、翻訳書の刊行を専門とする部局を作るという構想があったことも興味深い。

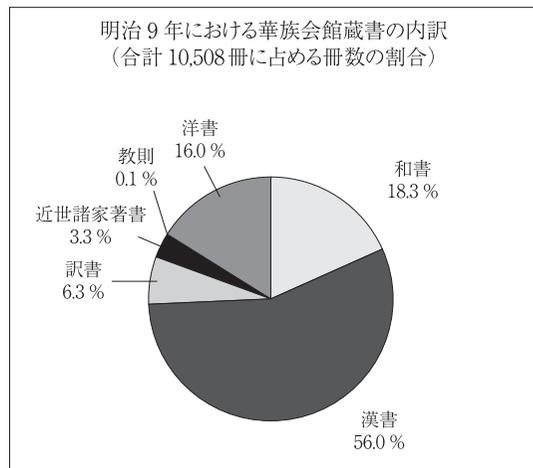
次に、明治9年(1876)の時点における会館蔵書の内訳が伝わっているので、これを見て

みよう(表3)。冊数で見ると和漢の典籍が7割以上を占めているが、書目数でいくと、102種の翻訳書が和書の69種を抜き、漢籍の131種に迫る数字となっている。また、和書の冊数に肉薄する量の洋書が所蔵されていた点も見逃せない。「近世諸家著書」に分類されているのは、実際に華族会館旧蔵書と確認された書籍で見ると、翻訳書でも活躍した福沢諭吉・加藤弘之・福地源一郎らの著述がこれに相当しよう。「教則」は教育課程を示した学制の類と考えられる。したがって、「和書」「漢書」という伝統的な典籍に対して、「訳書」「近世諸家著書」「教則」「洋書」の4類は新しい近代的な書籍として一括することができる。この4類を合計すると、冊数のうえでも全体の4分の1を超えている。さらに、典籍で1つの書目あたりの冊数が多いことを考慮に入れて、書目の数で比較してみた場合、典籍と近代書の割合は200種:161種と拮抗する。洋書の書目数は不明だが、これを近代書に加えた場合、両者の数字は逆転し、近代書のほうが過半数を上回っていたことは確実である。

表3 明治9年における華族会館蔵書の内訳

分類	数量
和書	69種 1,922冊
漢書	131種 5,882冊
訳書	102種 658冊
近世諸家著書	50種 351冊
教則	9種 9冊
洋書	1,686冊 (英 1,212冊) (仏 261冊) (独 213冊)
合計	10,508冊

※『華族会館誌』巻4、明治9年10月24日条による。



以上のような傾向の中で松平頼聰の寄贈書を見てみると、その特異性はすこぶる際立っている。

第一に、寄贈書籍の数量が膨大であること。華族会館の蔵書は明治9年段階で合計10,508冊であり、頼聰の寄贈書はその3割近くを占めていた。頼聰の35部3,051冊に匹敵するのは、勝海舟を仲介とする徳川家達の約3,000冊だけである。

第二に、書籍の内容が伝統的な典籍、とりわけ漢籍で占められていることである。この点、徳川家達の寄贈書に624部1,851冊もの洋書が含まれていたのと大きな違いがある⁶³⁾。

第三に、典籍の内容・質の問題がある。もちろん、頼聰のほかにも典籍を寄贈した者は何人もいるし、初期の華族会館・華族学校(学習院)においても洋学一辺倒の状況にあったわ

けではない⁶⁴。漢学・和学と洋学とは、いわば車の両輪のような関係にあった。それは蔵書数の比率にも表れている。しかし、頼聰が寄贈した典籍の内容は、初等・中等教育には向かない高度なものがほとんどであり、しかも明版を含むなど典籍としての質がきわめて高いという点でも異例である。

結局のところ、頼聰がどのような基準で寄贈書目を選んだのかは謎である。その特異性は、会館からの脱盟を申し出るのと同時に、それと引き換えるようなかたちで寄贈を行ったという特殊な事情と関係しているようにも思われるが、推測できるのはここまでである。

2 華族会館旧蔵書研究の展望

松平頼聰の寄贈書を中心に考察してきたが、そのなかで他の寄贈者と共通する面があることや、華族会館の蔵書全般に言える傾向なども指摘した。要点を述べれば、華族会館の蔵書は、伝統的な和書・漢籍と西洋起源の近代書籍という2つの柱で構成されており、それぞれ寄贈を受けたり新規に購入したりすることによって整備されていった。

そのうち、和書・漢籍については、旧大名家などに伝わる蔵書の寄贈によって支えられていた。高松松平家の場合について見てきたとおり、その伝来過程を辿ることによって、大名家の蔵書や集書活動の様相に迫ることができるだけでなく、そのような伝統社会の書籍や知識がどのようにして近代に食い込んでいったかを明らかにすることができよう。時間を遡ってその伝来過程を探るという方法は、華族会館旧蔵書を構成する書籍の意味を考えるうえで、1つの重要な軸と言える。

高松松平家旧蔵書のほかにもう1つ例を挙げれば、勝海舟を介した徳川宗家（家達）からの寄贈書にも大量の漢籍が含まれている。前回の調査のときにはその書籍を特定することができなかったが、最近になって新たな進展があった。まず、学習院大学図書館に伝わる華族会館の蔵書目録などによって、華族会館旧蔵書のうち慶長古活字版『史記』（架蔵番号422/58）が徳川宗家寄贈書の1つであることが判明した⁶⁵。さらに、この『史記』に捺されている「養賢閣図書記」の蔵書印は、現在の宗家に伝わる典籍にも捺されており、もとは第14代将軍徳川家茂が中奥に創設した学問所「養賢閣」の蔵書である可能性が指摘された⁶⁶。学習院が所蔵する華族会館旧蔵書のうち、「養賢閣図書記」の蔵書印を持つものは合計10部276冊にのぼっており、すべて家達から一括して寄贈されたものと考えられる。今後、そのほかの宗家（家達）寄贈書も明らかとなれば、家茂の学問所の性格だけでなく、徳川將軍家の蔵書の一端にも接近することができることになろう。

華族学校（学習院）が開校する明治10年（1877）10月17日までに華族会館へ寄贈された書籍は、表2【華族会館への書籍寄贈】をもとに概算すると、和書・漢籍・洋書あわせて総計9,814冊にのぼる。前年明治9年10月時点での会館蔵書の総数が10,508冊、学習院に寄贈された会館蔵書の総数が10,790冊であることからすれば、華族会館の蔵書が寄贈によっ

て成り立っていたものであることは明白である。したがって、華族会館旧蔵書を構成している個々の蔵書の由来を追究することは、会館の蔵書全体の意味を考えるうえで、欠くことのできない視点である。

それと並んでもう1つの軸となるのは、蔵書を構成する書籍の内容を検討することである。教育機関にはそれぞれ固有の教育理念があり、その理念は蔵書の構成に反映するはずだからである。ただ、この方法で精度の高い分析結果を出すためには、その前提として、華族会館旧蔵書ができる限り全部に近いかたちで把握されている必要がある。しかし残念なことに、現在までに確定できているのは和漢書317部6,509冊（参

考まで含めると321部6,533冊）にとどまっており、記録上で学習院に寄贈されたことになっている総数10,790冊のうち、6割にも達していない。和漢書に限定しても、9,176冊のうち、7割に満たない。

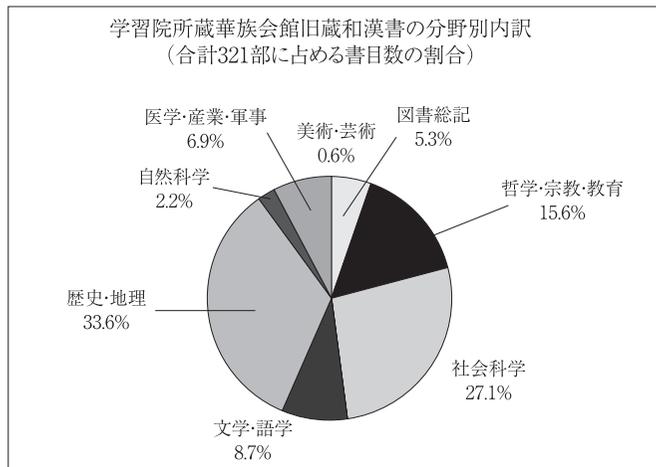
参考までに、筆者らが調査した「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録」をもとにして、書籍に付けられた分類番号に従って分野ごとの内訳を算出してみたのが、表4【学習院所蔵華族会館旧蔵和漢書の分野別内訳】である。

まず注目されるのは200番台の「社会科学」で、これには経済・法律・政治などに関する書籍が含まれており、翻訳書の多くもここに集中している。この分野が書目数で全体の4分の1を超えているのは、やはり法律を中心に西洋近代の知識を重視した華族会館の教育方針が反映していると言える。また、多数にのぼる「歴史・地理」の分野には、伝統的な和書・

表4 学習院所蔵華族会館旧蔵和漢書の分野別内訳

分類番号	類目	部数	冊数
000	図書総記	17	1988
100	哲学・宗教・教育	50	1211
200	社会科学	87	626
300	文学・語学	28	491
400	歴史・地理	108	2043
500	自然科学	7	37
600	医学・産業・軍事	22	120
700	美術・芸術	2	17
合計		321	6533

※未登録・参考扱いまで含めた計算。
 ※分類番号は大正11年改定のもの。



漢籍に加えて、欧米の歴史・地理に関する書籍が含まれている。600番台も欧米の工業・軍制に関する翻訳書がほとんどを占めており、それらに対する関心の高さを示していよう。ほかに100番台の存在感が大きいのは、大部の儒学書が含まれているからである。

今のところ、この程度の大まかな傾向を指摘するにとどめるが、書籍の把握が進めばもっと詳細な分析を行う意味も出てくるであろう。

以上は、和書・漢籍に限定した話である。華族会館の蔵書を考える際、その教育方針から言っても、蔵書全体に占める割合から言っても、洋書の存在を無視することはできない。会館から学習院に引き継がれた書籍10,790冊のうち、洋書1,614冊が占める割合は15%にも及んでいるのである。にもかかわらず、現在までのところ、華族会館旧蔵書の調査は、洋書にまったく手が及んでいないのが実情である。この洋書を発掘するまでは、華族会館旧蔵書の全貌は明らかにならない。また、洋書も含めた華族会館旧蔵書の全体構造が明らかにならないければ、蔵書を構成する個々の書籍の史的な価値も正確に見極めることはできないであろう。

華族会館旧蔵書の全体を把握するための大前提として、まずは洋書まで含めた華族会館旧蔵書の徹底的な調査を、大学図書館内にとどまらず、法経図書センターや学部・学科等に移管されたケースまで想定して行う必要性を強調しておきたい。そのうえで、蔵書を構成している個々の書籍の位置づけを、〈伝来経緯〉と〈内容〉の両面から検討することによって、初めて全体の構造が把握できると考えられる。そのとき、明治初年に模索された華族教育の様相と、華族という特権階層の知の有り様に、我々は迫ることができるようになるはずである。

おわりに

本稿を閉じるにあたって、筆者の気づいた課題を指摘しておきたい。

まず、学習院が所蔵する華族会館旧蔵書のコレクション化を提案したい。すでに述べたように、華族会館は学習院の設立・運営母体であった。したがって、その蔵書は、学習院における教育の出発点をなすものであり、学習院のアイデンティティと教育機関としての来歴を示す、きわめて重要な資料である。これは、京都学習院旧蔵書についても言えることである⁶⁷⁾。これらをコレクションとして一括保管することは、学習院においてだからこそ大きな意義を持つ。なぜなら、たとえ個々の書籍が書誌学的にはありふれた内容のものであったとしても、創立当初から現在に至るまで学習院に伝世してきたことに意味があるからである。それは、学習院が歩んできた足跡そのものである。

コレクション化を提案したもう1つの理由として、書籍の散逸の危険性を指摘しておく。現在、華族会館旧蔵書・京都学習院旧蔵書は、いずれも各書籍に付けられた番号に従って配

架されており、完全に分散した状況にある。しかも、それらを体系的に把握できるようなデータの蓄積や情報検索のシステム、保管の仕組みが何ら存在していない。どれが該当する書籍なのか、どこにどれだけあるのか、図書館員も含めて誰にも分からないのである。筆者が調査を発案し、目録の作成を試みた所以である。京都学習院旧蔵書を調査した際、日本語日本文学科の書庫で3点の資料を発見したが、これは氷山の一角であろう。そもそも「伝統」を掲げる学習院にあって、京都時代の蔵書の存在が、学内でさえほぼ完全に忘れられていたことは驚きであった。コレクションとして一括して保管することによって、こうした忘却とこれ以上の散逸を未然に防ぎ、学習院の歴史的資料として永く継承されていくことが期待できよう。

最大の課題は、くり返しになるが、華族会館旧蔵書の徹底的な調査の必要性である。いまだ和書・漢籍の把握でさえ完全ではなく、洋書に至ってはまったく手つかずの状態である。加えて、本稿で高松松平家旧蔵書を検討したように、個々の書籍の伝来過程を探ることも、蔵書群としての性格を見極めるうえで重要な作業になる。ところが、このような調査のためには、実際に1点1点現物にあたりながら、こつこつと蔵書印や書誌情報を採っていくという地道な作業が要請される。また、もれなく網羅的に該当する書籍を把握するためには、書庫に入って片端から書籍を手取る以外に方法はない。それは非常に時間と根気の要るものであり、個人のレベルで行うには限界がある。したがってその調査は、学習院の内部において戦略的・計画的・組織的に行われるのであれば、進展することはありえない。

これは、華族会館旧蔵書に限ったことではなく、旧分類図書全般について言えることである。そのような試みとして、筆者は、学習院大学における平成15・16年度(2003-04)新規重点施策「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」の一環として、学習院大学図書館東1号館書庫(旧分類図書)の悉皆調査を行った。筆者がこの調査を発案した理由は、蔵書群としての全体構造を〈伝来経緯〉と〈内容〉の両面から把握しなければ、個々の書籍の史料的な価値も見極められないと考えたからである。この調査は、簡略ながら蔵書印・寄贈者名を含む旧分類図書全点の書誌情報をデジタルデータ化し、とりわけ大型の旧蔵書群については『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵和漢図書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』をまとめたことで、一定の成果を挙げたと言えるように思う。だがその一方、本稿で述べてきたように、残された課題も多い。今後の進展を期して、ひとまず稿を閉じたい。

註

- 1) 御厨義道「高松松平家の成立と徳川御三家」、胡光『『水戸学』と高松松平家』(いずれも香川県歴史博物館編『開館記念特別展 徳川御三家展』香川県歴史博物館、2000年)。
- 2) 香川県歴史博物館が保管する高松松平家資料については、目録の作成が進められている。

- 「松平頼武資料」（香川県教育委員会編『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成5・6年度—』香川県教育委員会、1996年）、および「松平頼武資料（2）」（香川県教育委員会編『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成7年度—』香川県教育委員会、1997年）。
- 3) 学習院大学文学部「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」作業委員会編『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵和漢図書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』（学習院大学、2005年3月）所収。このうち「華族会館旧蔵和漢書目録」は、大内雅人・坂田充の共編。
- 4) 『華族会館誌』明治8年5月23日条。なお、寄贈した側である高松松平家の『高松松平氏歴世年譜』巻14・明治8年7月16日条に「蔵書三十三部 千九百三十七冊ヲ華族会館ニ寄附ス」とあり、その備考に書目と数量が記載されている。しかし、備考に挙げられている書目・数量を合計すると30部2,559冊となり、この時点ですでに記事本文と計算が合わない。また、学習院に現存する書籍と比較した場合、個別に見ても全体として見ても食い違いが大きい。加えて、寄贈の日付を7月16日としているのも不審である。両者の史料的性格を説明すると、香川県歴史博物館に保管されている『高松松平氏歴世年譜』（資料番号1043）は、関東大震災での史料散逸を機に編纂され、昭和4年（1929）に成立したという編纂物である（『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成5・6年度—』〔前掲〕159頁）。一方、『華族会館誌』も同じく編纂物ではあるが、明治7年（1874）の会館創立後まもなく編纂が始められ、明治27年（1894）に中絶したものであり、ほぼ同時代の記録として記事の信頼性が高いと言える（霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』〔吉川弘文館、1986年〕所収の、大久保利謙・上野秀治による「解説」を参照）。よって、本稿では『華族会館誌』の記事に拠っておく。
- 5) 胡光「松平頼武資料解題」（『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成7年度—』前掲）493頁。
- 6) 永年会編『増補高松藩記』（臨川書店、1973年）、『香川県史 第3巻（近世I）』（香川県、1989年）第9章第2節第3項「高松藩の藩校」。
- 7) 『随観録』第2号第72項「銅印『考信閣文庫』」、『松枝舎史』第15章「雑記」のうち「考信閣文庫銅印」。両書とも香川県歴史博物館が保管。『松枝舎史』（資料番号926）は、廃藩置県後の松平家の東京移住にともなって高松に置かれた会社の編纂物で、昭和15年（1940）成立。『随観録』（資料番号937）の成立年代は、昭和前期と推定。胡光ほか「徳川頼武資料解題」（前掲）参照。
- 8) 『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成7年度—』（前掲）のうち、31番「徳川頼武資料（2）」。同書521頁に写真が掲載されているほか、胡光氏による「資料解題」も参照。
- 9) 書籍の部数について、目録のNo.14『読礼通考』は、寄贈記録に見える『五礼通考』12帙120巻から切り離されたものと考えられるため、寄贈書目と目録との間で数え方にズレが生じていることをお断りしておく。
- 10) 学習院における大正11年改訂の分類番号については、『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』（前掲）6-9頁に掲げた、「学習院和漢書分類表」を参照されたい。
- 11) 例えば、小宮山敏和編「学習院大学所蔵立花種恭・種忠旧蔵書目録」（『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』前掲）によると、全140点のうち、3点の書籍だけが現行の分類番号を付けられて、大学図書館の東1号館書庫から本館書庫に移動されている。

- 12) 例えば、京都学習院旧蔵書のうち、3点の書籍が文学部日本語日本文学科の所蔵となっていた。拙稿「学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録」(『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』前掲)参照。
- 13) 学習院大学東洋文化研究所で2004年度から始まった「東洋文化アーカイブズプロジェクト」の漢籍データベースセクションにおいて、学習院大学が所蔵する全漢籍の調査が行われており、最終的には漢籍目録の作成を予定しているとのことである。
- 14) 『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』(前掲)のうち、「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録」、および81-82頁の付表「高松藩主松平頼聡旧蔵書」を指す。また、同書拙稿の解説も、同様に訂正の対象である。
- 15) 高松松平家旧蔵書に関わる記録・目録類について、香川県歴史博物館が保管する高松松平家文書の調査結果をまとめておく。
- 『松枝舎史』第15章「雑記」・第9項「披雲閣文庫書籍」、および『随観録』第1号・第109項「披雲閣御文庫書籍」はほぼ同様の記述で、いずれも明治以降、再建後の披雲閣文庫の書籍の来歴を簡略にまとめている。高松藩時代の考信閣の蔵書についても触れられているが、具体的に寄贈者・寄贈書名が挙げられているのはごくわずかで、華族会館に寄贈された書目は見あたらない。また、『随観録』第2号に「松平家珍書目録」(第75項)という項があり、宋版『大般若経』ほかの稀観書29種140冊を列記しているが、やはり華族会館へ寄贈された書目は見えない。
- 高松松平家の蔵書目録としては、『披雲閣蔵書目録』(資料番号699)および『蔵書目録』(資料番号1204)がある。前者は、高松における蔵書目録で、大正2年(1913)の成立。後者は、東京本邸の蔵書目録と推定され、成立は昭和前期。いずれも明治以降、かなり時代が降った頃の目録であるから、収録された書籍の数は高松藩時代に比べてほんのわずかというべき程度であり、当然、華族会館へ寄贈された書目も見えない。
- なお、関連する蔵書目録として、東京大学史料編纂所に松平頼壽所蔵『披雲閣蔵書目録』(請求番号RS2000-38)および『目黒文庫蔵書記』(請求番号RS2000-15)の謄写本が所蔵されている。同所の所蔵史料目録データベースによると、謄写年次は明治44年(1911)とされているので、目録原本の成立はそれ以前に遡ることになる。高松に残る目録と比較検討する余地があるが、2007年9月現在、史料編纂所の史料は閲覧不可能な状況にあるため、ここではその存在を記すにとどめざるをえない。
- 16) 『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成7年度—』(前掲)520頁ほか。以下、香川県歴史博物館収蔵本の押印状況については同じ。
- 17) 熊野勝祥『香川県図書館史』(香川県図書館学会、1994年)。同書43頁では、香川県博物館図書閲覧所に保管されていた講道館旧蔵書について、明治37年(1904)時点で456部6,868冊あったとされている。
- 18) 渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』(青裳堂書店、2001年)にも、大型印のみしか掲載されていない。
- 19) 『松枝舎史』第15章「雑記」のうち第9項「披雲閣文庫書籍」、および『随観録』第1号のうち第109項「披雲閣御文庫書籍」。
- 20) 草薙金四郎「讃岐の文庫について—県立図書館展示の蔵書印から—」(『香川県蔵書印影展示目録解説』香川県立図書館、1958年)。

- 21) 『香川県史 第3巻(近世I)』(前掲)第9章第3節第1項「国学」。胡光『『水戸学』と高松松平家』(前掲)、同「高松松平家編纂『歴朝要紀』の諸本について」(『香川史学』30、2003年)。
- 22) 『国書人名辞典 第1巻』(岩波書店、1993年)の「梶原藍渠(かじわらんきよ)」の項を参照。
- 23) 『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成7年度—』(前掲)によると、同館が保管する「松平頼武資料」のうち、「平氏文庫」印のある資料は8点で、そのうち2点が「考信閣文庫」印とセットになっているようである。
- 24) 『随観録』第1号・第109項「披雲閣御文庫書籍」によると、披雲閣文庫は、(1)考信閣時代の書籍、(2)明治40年以降に購入した書籍、の2種類で構成されており、さらに考信閣文庫についても、①多くは江戸廻りで購入した新写本、②諸氏からの献上本、の2種から成っていたとし、このうち考信閣への献上本として「梶原平四郎」の名前が挙がっている。ただし、梶原景惇の通称としては「三平」と「九郎右衛門」が知られているので、同定してよいか多少疑問が残る。
- 25) 草薙金四郎「讃岐の文庫について」(前掲)。『香川県史 第3巻(近世I)』(前掲)第9章第3節第1項「国学」および同第3項「高松藩考信閣と丸亀藩地志掛」も参照。なお、『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録—平成7年度—』(前掲)によると、同館が保管する「松平頼武資料」のうち、「五松屋文庫」が押印されている資料は6点ある。
- 26) 『国史大辞典』(第11巻、吉川弘文館、1990年)では「林羅山」の項に印影が載せられているが、『新編蔵書印譜』(前掲)等では林靖の蔵書印とされている。羅山・靖ともに「読耕齋」の号を使用しているが、後者の比定に拠っておく。
- 27) 『増補高松藩記』「旧高松藩内学事沿革大要」。『香川県史 第3巻(近世I)』(前掲)第9章第2節第3項「高松藩の藩校」。
- 28) 目録のNo.8『群書類従』のうち巻219～250および399のみ、松平頼聰の印が見えないが、「考信閣文庫」の印は捺されているので、頼聰が一括して寄贈したものと判断される。なお、この他の書目については、全冊に漏れなく頼聰の蔵書印がある。
- 29) 『増補高松藩記』「旧高松藩内学事沿革大要」によると、元治元年(1864)、城内陸軍所の内に洋兵学校が設置され、翌慶応元年(1865)には講道館の内に洋学校が設立されている。
- 30) 『学習院大学図書館蔵書印譜 巻2』(学習院大学図書館、1991年)に掲載されているが、この本は学習院大学図書館の司書であった佐野眞氏(故人)が独力で作成された私家版と言うべきもので、ごく限られた範囲にしか配布されていない。
- 31) 『増補高松藩記』巻7に、「嘉永六年癸丑六月廿五日、靖公(松平頼聰)養以為世子。時年二十。九月廿五日、公始調大將軍(徳川家茂)(温恭公)。(中略)十一月七日、公叙従四位下、任侍従、称宮内大輔」とある。なお、『高松松平氏歴世年譜』巻14によると、元治元年(1864)4月18日には従四位上に叙されているが、正四位にのぼったのはかなり遅れて明治20年(1887)12月のことである。
- 32) 国立公文書館(内閣文庫)所蔵『岩倉具視関係文書』岩倉文書75・華族会館書類5(請求番号265-286)。当該文書は「華族会館」罫紙。『華族会館誌』によると、頼聰が寄贈を申し出た日付は3月4日。実際に寄贈されたのは、5月23日のことである。
- 33) 『華族会館誌』明治7年2月10日条。
- 34) 国立公文書館(内閣文庫)所蔵『岩倉具視関係文書』岩倉文書75・華族会館書類5(請求番号265-286)。当該文書も「華族会館」罫紙。松平頼聰の寄贈願いと隣接して綴じられている。『華族会館誌』明治8年1月24日条には、本文書の要約が載せられている。ちなみに、実際に書

籍が寄贈されたのは同年7月10日のことである。

- 35) 華族会館の史料からは、この寄附に徳川家達がどれだけ関与していたのか、はっきりしない。しかし、『海舟日記』（『勝海舟全集』勁草書房、1972-73年）によると、明治8年1月19日条に「溝口へ三位殿より、華族書籍館へ献金二千元、書物千部相納むべき旨、相談」、同年7月10日条に「華族会館へ三位殿より金二千元、洋漢書籍二千余巻相納む」とあって、書籍・建設費用ともに徳川家達が寄附の主体であり、勝は家達の意向を受けて会館との間を仲介していたことが分かる。
- 36) 『華族会館誌』明治8年1月24日条。
- 37) 『華族会館誌』によると、頼聰の寄贈書が会館に送付されたのは明治8年5月23日で、頼聰が会館から除名されたのは翌24日である。
- 38) たとえば、『華族会館誌』明治7年11月13日条には、副館長醍醐忠順が会員に一致協力を訴えた文書が載せられている。なお、創立直後における華族会館の危機的状況については、霞会館編『華族会館史』（霞会館、1966年）327頁以下、および霞会館（大久保利謙）編『華族会館の百年』（筑摩書房、1975年）15頁以下を参照。
- 39) 保続金は、会館の維持・運営費というべきもので、家禄の1.5%を毎年納入する決まりであった。金禄公債証書発行にともなう改編では、高松松平家の公債証書の額面は30万1,930円とされ（『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治9年8月5日条）、それにともない華族会館の保続金も公債証書利子の1.5%に改められ、同家では毎年216円を納入したという（『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治10年年末条）。
- 一方の資本金は、同盟時に支払い、会館の建設経費に充てられるものであり、その負担は禄高に応じて家禄千石以下の1/100から家禄2万石以上の1/10まで累進的に重く定められていた。高松松平家の家禄は1万576石であり（『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治3年年末条）、同家が負担する資本金は上から2番目に重い1/15であった。資本金の規定については、「華族大会館仮規則」（明治7年2月4日）第1章第2条（霞会館諸家資料調査委員会編『華族制度資料集一 昭和重修華族家系大成別巻一』〔吉川弘文館、1985年〕所収）。なお、明治8年11月の「華族会館章程」で負担額が改定されており、家禄一万石以下の負担が増加されたものの、一万石以上については同じである。
- 40) 『華族会館誌』明治8年2月6日条。
- 41) 『華族会館誌』明治8年2月28日条。土井の書簡には、「忠直、旧管ノ学校生徒維新已来稍勉勵ノ色ヲ顕ハスモ、一朝廃県ノ命下ルニ及ンテ閉齋セリ。其後、新県官、文部教則ニ基キ小学ノ設立アルモ、資金僅ニ百余円ニ過キサレハ、其費用ニ充ツルニ足ラス。之カ為メ、生徒廃業、再ヒ閉校ノ憂アリ。忠直、之ヲ傍観スルニ忍ヒス。是以テ、暫ク会館ノ同盟ヲ脱シ、保続金ヲ以テ該校ノ費用ニ加ヘ、其廃セントスルヲ興シ、以テ人民ニ対スルノ義務ヲ尽サント欲ス。」とある。
- 42) 『華族会館誌』明治8年3月6日条。
- 43) 『華族会館誌』明治8年3月28日条。
- 44) 頼聰が明治7年度分の保続金については支払っていたことが、『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治7年4月8日条の「華族会館ニ保続金トシテ毎家家禄税ヲ除キ現石百ノ一分五厘代金ヲ醸出ス」という記事によって確認できる。明治8年度分の支払いについては不明。
- 45) 『華族会館誌』明治8年4月6日条。
- 46) 『華族会館誌』明治8年4月21日条。

- 47) 『華族会館誌』明治8年5月20日条。
- 48) 『華族会館誌』明治8年5月21日条。
- 49) 『華族会館誌』明治8年5月23日条。
- 50) 『華族会館誌』明治8年5月24日条。
- 51) 『華族会館誌』明治11年6月24日条。
- 52) 『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治8年9月5日条。
- 53) 『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治10年3月1日条。
- 54) 私学玉藻学校から公立玉藻小学校への変遷については、文京区役所編『文京区史 第3巻』(文京区役所、1968年)742頁以下を参照。
- 55) 『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治10年7月26日条「本郷玉藻学校へ金五十圓ヲ寄附ス」、同12月21日条「本郷玉藻学校へ明治十一年中金六十圓ヲ寄附ス」。
- 56) 『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治5年10月晦日条。
- 57) 以下、岩倉による会館および華族制度の改革については、『華族会館史』(前掲)327頁以下、および『華族会館の百年』(前掲)15頁以下を参照した。
- 58) 『華族会館誌』明治8年10月7日条。
- 59) 『高松松平氏歴世年譜』巻14、明治11年10月21日条。
- 60) 国立公文書館(内閣文庫)所蔵『華族類別録』(請求番号ヨ281-176)による。
- 61) 学習院大学図書館所蔵『学習院第一学年報』(請求番号G93/17)掲載の書籍表による。なお、『学習院第二学年報』(同前)の書籍表によると、翌明治11年にも華族会館から和漢書17冊が学習院に寄贈されている。
- 62) 『華族制度資料集』(前掲)所収。
- 63) 『海舟日記』によると、勝海舟(徳川家達)が華族会館へ書籍の寄贈を申し出た後、明治8年3月8日条に「瑞穂屋の書籍千両の上、今百両、中村返金にて相払い申すべき旨話し置く」、同10日条に「瑞穂屋より洋書来る」、同22日条に「徳川家へ西洋書渡す」とあって、実際に寄贈が行われる直前に、勝が洋書の購入を差配していた様子が窺える。したがって、徳川家達から華族会館に寄贈された洋書は、徳川宗家(将軍家)の伝世品ではなく、寄贈に際して購入されたものがほとんどであったのかもしれない。勝および家達がどんな洋書を寄贈したのか興味をそそられるが、寄贈された現物を特定して検証する必要がある。
- 64) 明治初年における学習院の学科課程の具体的な内容と変遷については、『学習院百年史 第1編』(学校法人学習院、1981年)97頁以下に詳しい。
- 65) 広瀬淳子「徳川宗家から華族会館へ—古活字版『史記』の取蔵経緯を辿る—」(学習院大学外国語教育研究センター主催「学術シンポジウム 近世初頭の出版と学問—学習院大学蔵古活字版『史記』をめぐって—」〔於学習院大学、2006年12月2日〕配付資料)。これによると、学習院大学図書館の内部資料として、『華族会館蔵書目録』『華族会館寄贈図書目録(明治十二年十月、学習院図書課)』などが存在するらしい。筆者は実見していないが、華族会館旧蔵書の全体像をつかむうえで重要な資料になると思われるので、同館による調査成果ないし原本の公開を待ちたい。
- 66) 藤田英昭「徳川家茂による奥向教育改革」(徳川記念財団編『徳川家茂とその時代 若き将軍の生涯』徳川記念財団、2007年)。同書17頁に蔵書印「養賢閣図書記」の写真が掲載されており、学習院所蔵本の印と一致している。

なお付言しておく、筆者はまったくの偶然から、国立公文書館(内閣文庫)の所蔵する

- 『改正四書集註』（請求番号 320-67）に「養賢閣図書記」の印が捺されていることを発見した。ところが、印文は同じでも、印影が宗家所蔵本・学習院所蔵本と異なっている。内閣文庫の蔵書の性格に鑑みて、これは同文でデザインを変えた別種の印であり、どちらも同じ「養賢閣」の蔵書と思われる。2つの印の使い分けや、内閣文庫にどれだけ「養賢閣」の蔵書が入っているのかも気になるところだが、現段階ではとりあえず存在の事実を指摘するに止める。
- 67) 拙稿「学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録 解説1」および「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 解説」（前掲）。

【附記】

- ・本稿は、平成 17～18（2005-06）年度、学習院大学人文科学研究所における共同研究プロジェクト「京都学習院旧蔵史料の書誌学的研究」の成果の一部である。
- ・香川県歴史博物館に保管されている高松松平家資料については、2007年1月5～7日に調査を行った（参加者：小宮山敏和・坂田充）。香川県歴史博物館学芸課の胡光・高木敬子の両氏には、資料閲覧の便宜を図っていただいただけでなく、高松松平家および当該資料に関して多大なご教示を賜った。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。
- ・学習院大学図書館での調査・書籍閲覧・写真撮影などにあたっては、もと同図書館主事の広瀬淳子氏（現・嘱託）、ならびに同運用課の白石和徳氏にお世話になった。あらためて深甚の謝意を表したい。
- ・本文中でも繰り返し触れたが、本稿は学習院大学文学部「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」作業委員会編『学習院大学所蔵 京都学習院旧蔵書目録、華族会館旧蔵和漢書目録、立花種恭・種忠旧蔵書目録、乃木文庫目録、福羽美静文庫目録』（学習院大学、2005年3月）と補充関係にある。あわせてご覧いただければ幸いである。

ENGLISH SUMMARY

The collection of books of the Takamatsu Clan in the library of Gakushuin University

— The contents and change of owners of the collection —

Mitsuru SAKATA

This paper is a report on the collection of books of the Takamatsu Clan (高松藩) in the library of Gakushuin University. The ownership stamps of those books and some documents show that those books were formerly owned by the Takamatsu Clan, and then gifted to Kazoku-Kaikan (華族会館) by Mr. Yoritoshi Matsudaira (松平頼聰), the feudal lord of the domain of Takamatsu. The number of the books amounts to two thousand nine hundred and five. Almost all of the books are classics of China and Japan. Some of the Chinese books especially are very precious. From the collection, we can get an understanding of the scholarship and education of the Takamatsu Clan in the Tokugawa period, as well as knowledge about the learning of Kazoku (華族), the aristocracy, in the period when modern Japan was emerging.

Key Words: The Takamatsu Clan (高松藩), The Matsudaira family (松平家), Kazoku-Kaikan (華族会館), Gakushuin (学習院), library

表5 学習院大学図書館所蔵 高松松平家旧蔵書目録

No.	架蔵番号	書名	巻数	数量	書誌情報	印	備考
1	030/6	玉海 附十三種	二百四巻	120冊	宋 王応麟撰、清 乾隆三年補刊序（明 正徳二年～清 乾隆五十六年補刊）、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣」	詩攷一卷、地理攷六巻、漢芸文志攷十巻、通鑑地理通釈十四巻、王会一卷、漢制攷四巻、踐阻篇一卷、急就篇四巻、小学紺珠十巻、姓氏急就篇二巻、六経天文篇二巻、周易鄭康成注一卷、通鑑答問五巻の十三種を附刻
2	030/42	冊府元龜	一千巻	240冊	宋 王欽若等奉勅撰、明 李嗣京参閱、文翔鳳訂正、黄国琦較積、清 康熙十一年序、五緯堂蔵版	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣」	
3	030/44	三才図会		80冊	明 王圻纂輯、王思義統集、爾賓重校、明 万曆三十七年序、金園宝翰楼蔵版	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣蔵書」	
4	030/45	山堂肆考		80冊	明 彭大翼撰、明 張幼学編、明 馮任等較、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣蔵書記」	
5	030/55	太平御覽	一千巻	300冊	写本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣蔵書」「■■堂書画印」	
6	030/68	唐宋白孔六帖	一百巻	40冊	唐 白居易撰、宋 孔伝統、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣蔵書」	
7	030/76	万姓統譜		50冊	明 凌迪知撰、日本 鶴飼敬順真泰点、延宝九年京都秋田屋山本平左衛門常知刊	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣」	
		歴代帝王姓系統譜	六巻	2冊			
		古今万姓統譜	一百四十巻	44冊			
		氏族博攷	十四巻	4冊			
8	040/1	群書類従	五百三十巻、欠本	595冊	日本 塙保己一編、版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「考信閣文庫（大）（小）」 「平氏文庫」「五松屋文庫」「狂哥堂文庫」「生駒文庫」「会心珍賞」「田弓堂蔵書記」「末吉文庫」ほか多数	目録の奥に天保9年の識語あり。「群書類従以呂波早引」1冊のみ写本。冊数は全667冊のうち関連蔵書印のあるもの。冊ごとに押印されている印の種類にムラが大きい。

9	040/36	津逮秘書		240冊	明 毛晋編、崇禎三年序、汲古閣藏版、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣」「講道館（大）」、封面「葉氏天葆堂印」	
10	113/7	〔欽定四經〕		87冊	中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣」	
		御纂周易折中	二十二卷、首一卷、欠本（卷三・四欠）	15冊	清 李光地等奉勅撰、康熙五十四年序		
		欽定書經伝説彙纂	二十一卷、首二卷	16冊	清 王頊齡等奉勅撰、雍正八年序		
		欽定詩經伝説彙纂	二十一卷、詩序二卷、首二卷	24冊	清 王鴻緒等奉勅撰、雍正五年序		
		欽定春秋伝説彙纂	三十八卷、首二卷	32冊	清 王揆等奉勅撰、康熙六十年序		
11	113/60	御製三礼義疏		127冊	清 莊恪親王允祿等奉勅撰、紫陽書院藏版	「從四位松平頼聰精力所集」「講道館（大）」	
		欽定周官義疏	四十八卷、首一卷	32冊			
		欽定儀礼義疏	四十八卷、首二卷	40冊			
		欽定礼記義疏	八十二卷、首一卷	55冊			
12	113/63	五礼通考	二百六十二卷、首四卷、欠本（卷二十八～八十四欠）	70冊	清 秦蕙田撰、清 方觀承校、乾隆十八年序、味經窩藏版	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣」	第二・三帙（第11～30冊）欠
13	113/64	説礼通考	一百二十卷	34冊	清 徐乾学撰、康熙三十五年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣」、不明印1点	
14	113/65	説礼通考	一百二十卷	30冊	清 徐乾学撰、康熙三十五年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣」	113/63の附刻か
15	115/2	性理大全書（性理大全）	七十卷	40冊	明 胡広等奉勅撰、樊獻科重訂、嘉靖三十八年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣藏書」「講道館（大）」	第22冊（卷35～37）、30冊（卷52～54）補写
16	116/7	林子（林子全集）		32冊	明 林兆恩撰、游万儒等校、万曆三十四年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」	補写あり
17	255/1	万寿盛典初集	一百二十卷	44冊	清 馬齊等奉勅撰、趙之垣等校刊、康熙五十六年進表、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」「披雲閣」	

18	255/2	南巡盛典	一百二十卷	48冊	清 高晋等奉勅撰、乾隆三十六年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣」	
19	255/5	通典	二百卷	40冊	唐 杜佑撰、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣藏書」「中原」「職忠」 「出納」	蔵書印「職忠」「出納」は表紙・奥などに押捺
20	292/1	公卿補任		55冊	日本写本	「從四位松平頼聰精力所集」 「考信閣文庫(小)」「平氏文庫」	内容は文政七年まで。天文年間藤原言継の書写 奥書ほかの本奥書あり
21	301/66	古楽苑	五十二卷、前一卷、 衍録四卷	40冊	明 梅鼎祚輯、呂胤昌校閱、 辛卯年(万曆十九年カ)汪道 昆序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「島範」「島氏子孫永保」「必 端堂図書記」「■卿」	表紙裏にも小島範の印あり
22	303/2	文苑英華	一千卷	101冊	宋 李昉等奉勅輯、明 隆慶元 年胡維新序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣」	
23	303/3	御定歴代賦彙	正集一百四十卷、外 集二十卷、逸句二卷	50冊	清 陳元龍奉勅編、康熙四十 五年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」	
24	303/4	御選歴代詩餘	一百二十卷	32冊	清 王奕清等奉勅編、康熙四 十六年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「必端堂図書記」「■節所蔵」、 不明印1点	
25	409/11	〈新刊〉吾妻鏡 (東鑑)	五十二卷	25冊	日本 寛文元年京都野田庄右 衛門刊	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣藏書」	
26	422/3	二十一史文鈔(史 鈔)	三百三十二卷	100冊	明 戴羲摘撰、清 雍正十三年 序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣」「■園圖書」	内題は「史記文鈔」～「元史文鈔」
27	423/16	晋書	一百三十卷、音義三 卷	52冊	唐 太宗李世民撰、日本 志村 楨幹句読、元祿十四年十五 年 松会堂版本(明 万曆十年 重修本重刊)	「從四位松平頼聰精力所集」 「講道館(大)」	
28	423/19	宋書	一百卷	45冊	梁 沈約撰、日本 志村楨幹句 読、宝永二年三年松会堂刊 (明 万曆刊本重刊)	「從四位松平頼聰精力所集」 「講道館(小)」「披雲閣藏書」	
29	423/21	梁書	五十六卷、欠本(現 存卷二十一～四十三、 目録)	6冊	唐 姚思廉奉勅撰、日本 荻生 茂卿句読、宝永二年三年松会 堂刊	「從四位松平頼聰精力所集」 「講道館(小)」「披雲閣藏書」	
30	423/23	南齊書	五十九卷	21冊	梁 蕭子顯撰、日本 荻生茂卿 句読、松会堂、元祿十六年宝 永二年刊本	「從四位松平頼聰精力所集」 「講道館(小)」「披雲閣藏書」	

31	423/24	陳書	三十六卷	13冊	唐 姚思廉奉勅撰、日本 志村楨幹句読、宝永三年松会堂刊	「從四位松平頼聰精力所集」 「講道館(小)」 「披雲閣蔵書」	最終冊奥に読了の識語
32	467/5	水経注	四十卷	12冊	後魏 酈道元注、明 鐘惺・朱之臣・譚元春評点、万曆四十三年序、小築蔵版、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣蔵書」 「読耕齋之家蔵」	
33	467/6	〔水経注积地 附水道直指・积地補遺〕		16冊	清 嘉慶二年新鐫、上池書屋蔵版、兩衡堂発兌、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」	
		水経	四十卷	13冊	後魏 酈道元注、清 張匡学积		
		水道直指	一卷	1冊	清 張匡学輯		
		水経注积地補遺	二卷	2冊	清 張匡学輯		
34	680/32	登壇必究	四十卷	40冊	明 王鳴鶴編輯、袁世忠校正、万曆二十七年序、中国版本	「從四位松平頼聰精力所集」 「披雲閣蔵書」	

計 2,905 冊

※ 「印」欄のうち、学習院および華族会館の蔵書印は全冊に捺されているので省略した。

表6 学習院所蔵本に見える高松藩関連の蔵書印とその押印状況

	旧蔵者・機関	印文	サイズ	点数	%
1	松平頼聰	従四位松平頼聰精力所集	縦 76 mm、横 46 mm	34 部	100%
2	披雲閣	披雲閣	縦 50 mm、横 25 mm	12 部	74%
3		披雲閣蔵書	縦 74 mm、横 32 mm	12 部	
4		披雲閣蔵書記	縦 69 mm、横 43 mm	1 部	
5	講道館	講道館 (大)	縦 76 mm、横 39 mm	4 部	24%
6		講道館 (小)	縦 38 mm、横 22 mm	4 部	
7	考信閣	考信閣文庫 (大)	縦 72 mm、横 24 mm	1 部	6%
8		考信閣文庫 (小)	縦 62 mm、横 19 mm	2 部	

※ % 欄は学習院大学所蔵本計 34 部のうちで押捺されている部数の割合。

※考信閣の % 欄については、大小の印が混在しているものがあるため、合計 2 部として計算。

図2 学習院本に見える高松藩関連の蔵書印

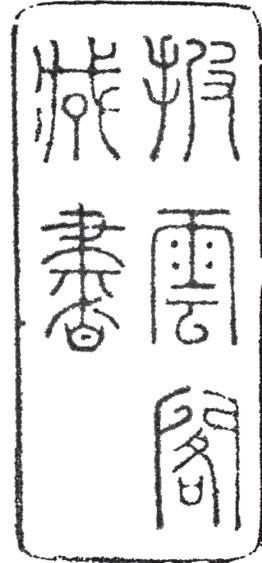
(印影はすべて学習院大学図書館所蔵図書から採取、ほぼ原寸大、実際はすべて朱印)



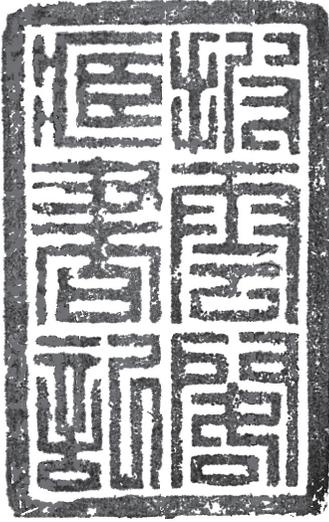
1. 従四位松平頼聰精力所集



2. 披雲閣



3. 披雲閣蔵書



4. 披雲閣蔵書記



5. 講道館 (大)



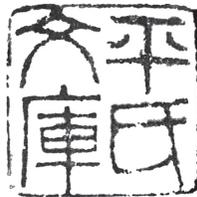
6. 講道館 (小)



7. 考信閣文庫 (大)



8. 考信閣文庫 (小)

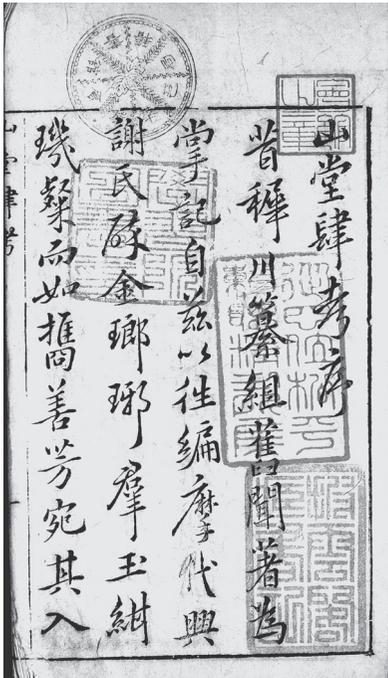


9. 平氏文庫



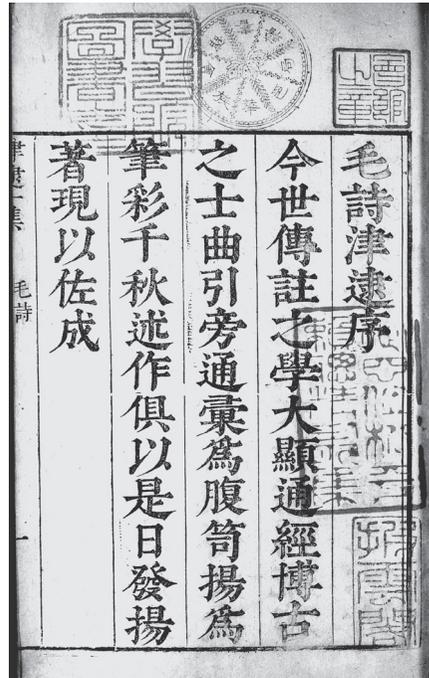
10. 五松屋文庫

【参考図版】(すべて学習院大学図書館所蔵図書)

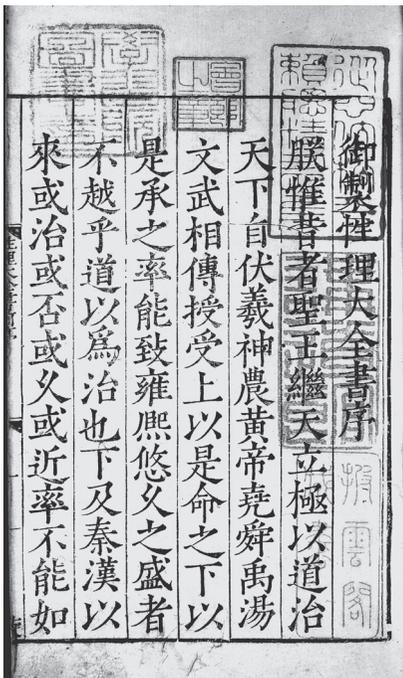


No. 4 『山堂肆考』

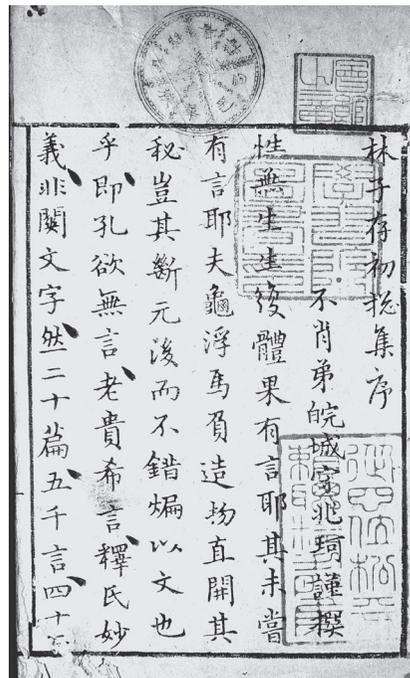
(上2点「華族会館書籍局印」「会館之章」、左「学習院図書印」)



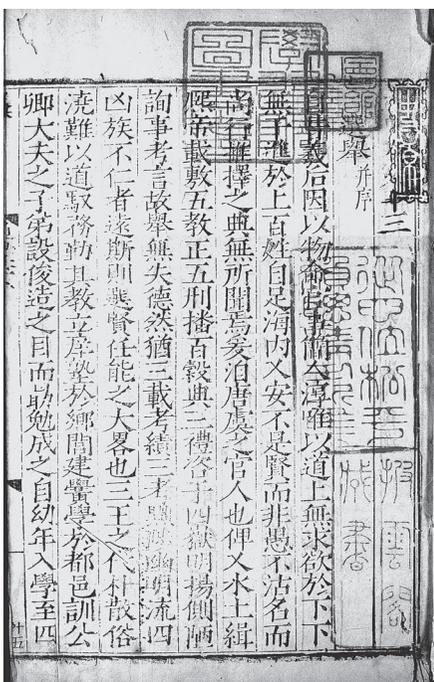
No. 9 『津逮秘書』



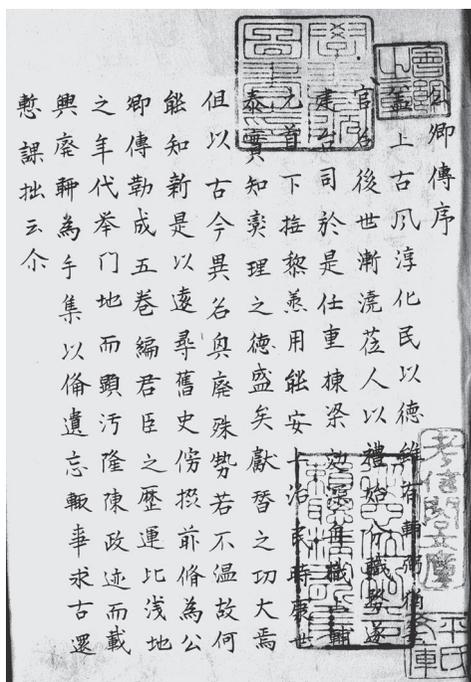
No. 15 『性理大全書』



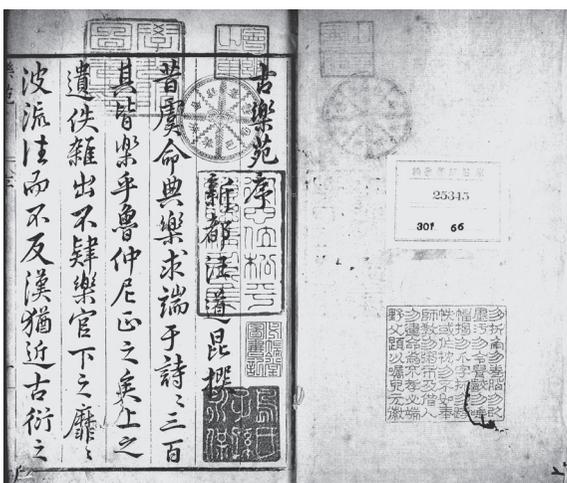
No. 16 『林子』



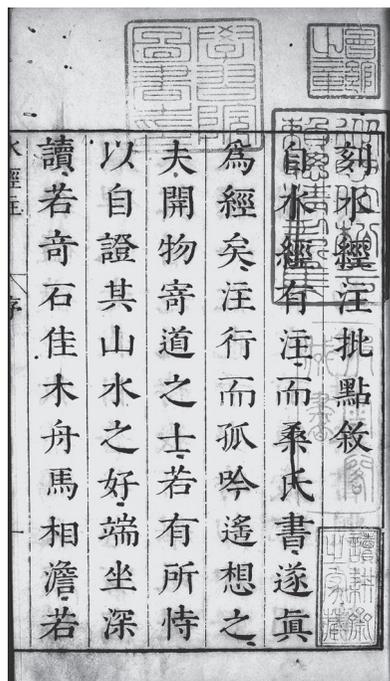
No. 19 『通典』
(右上「中原」)



No. 20 『公卿補任』



No. 21 『古楽苑』
(下2点「必端堂図書記」「島氏子孫永保」、表紙裏も小島の印)



No. 32 『水経注』
(右下「読耕齋之家蔵」)

表7 華族会館関連年表

慶応3年(1867)	10月14日	大政奉還。
	12月9日	王政復古。
慶応4年(1868)	8月27日	明治天皇即位。
	9月8日	「明治」改元。
明治2年(1869)	6月17-25日	諸藩主に版籍奉還を命じる。諸藩主を旧領地の藩知事に任命し、旧領地石高の10%をその家禄とする。
	6月17日	諸侯(旧藩主)と公卿を併せて 華族 とする。「官武一途、上下協同之思召ヲ以テ、自今、公卿・諸侯之稱被廢改テ華族ト可稱旨、被仰出候事」(行政官達)
明治3年(1870)	11月20日	武家華族をすべて東京に移住させる。
	12月10日	宮・公家(堂上)華族の「禄制」制定。
明治4年(1871)	7月14日	廃藩置県。
	10月22日	天皇、華族一同を宮中の小御所に召し、華族は士族・平民の上に立つ階層として国民の模範となるべく、勉勵して国家の開化富強のために尽力するように、との勅諭。
明治6年(1873)	12月6日	有志華族の第一次会開催。首唱者は正親町公董・五條為栄・壬生基脩・平松時厚・秋月種樹・河鱈實文・山内豊誠の7名。
	12月16日	第二次会開催。秋月種樹、大書籍館の建設を提案。
	12月26日	第三次会開催。社名を「 通欵社 」と定める。「通欵社書籍館規則」を議定。
明治7年(1874)	1月8日	前年来、麝香間祇候の中山忠能・松平慶永・嵯峨實愛・大原重徳・中御門経之・伊達宗城・池田慶徳らが華族の集会を企て、「 麝香間祇候会議 」と称し、「麝香間祇候集会主旨書条目」を定める。
	1月28日	通欵社・麝香間祇候会議の合併成立。
	2月4日	通欵社・麝香間祇候会議の両派発起人、「華族大会館仮規則」を定める。
	2月22日	中山忠能ほか15名会合。大会館建設地調査、ならびに建築経費・会館保続金の釀出を決める。
	6月1日	華族会館 創立。同盟(会員)150人、永田町の旧二本松藩邸の華族集会所に会合。館名を「華族会館」とし、有栖川宮熾仁親王を館長とする。
	11月14日	会館創立直後、同盟会員の中から脱退を請う者が多く出たため、副館長醍醐忠順が会員に同族協力の論議を發する。
明治8年(1875)	1月24日	勝海舟より徳川家達の蔵書および金2千円の寄附の申し出があり、これを受けて書籍館建設の機運が高まる。
	3月6日	会館の集会において、副議長壬生基脩が資本金1/4の募集を報告し、あわせて相継ぐ除名申請者に対して資本金の納入義務を果たすよう通告。
	4月21日	万里小路通房、西京華族集会所を華族会館へ合併することを諮り、可決する。
	10月7日	明治天皇、旧二本松藩邸の会館に臨幸。華族一同に勅諭が下賜され、華族一同が勅諭遵奉の誓詞に証印を行う。
	11月	「華族会館章程」が制定される。
明治9年(1876)	1月5日	華族会館の第一回開館式が行われる。記念式の席上において、 華族学校 の設立が提議される。
	1月19日	立花鑑寛・立花種恭・加納久宜、華族学校の設立を建議。
	2月4日	職員会議にて資本金収集法を定める。章程に従い、家禄の多少に準じて資本・保続の金円を課し、同盟に連署した者に納金させる。
	3月8日	宮内省達第26号により、宮内省が華族の統括を行うようになる。同10日、宮内省庶務課に華族掛を置く。
	3月19日	宮内卿の通達により、華族の諸願伺は華族会館において取り扱うこととされ、華族関係の庶務は会館の扱いとなる。
	4月18日	右大臣岩倉具視、華族会館の館長に就任。
	8月5日	「金禄公債証書発行条例」が公布され、華族の家禄・賞典禄が廃止となる。
明治10年(1877)	10月17日	華族学校 の開業式が行われる。天皇・皇后が行幸啓、校名を「 学習院 」とする勅諭が下される。同26日、京都時代の勅額「学習院」が下賜される。
	是年	華族会館より学習院に和漢書9,159冊・洋書1,614冊を寄贈。
明治11年(1878)	2月8日	学習院の会計事務を華族会館の所管とし、会館から会計職員を派遣する。
	8月22日	華族会館の本部を神田錦町の学習院内に移す。
	是年	華族会館より学習院に和漢書17冊を寄贈。
明治17年(1884)	4月17日	宮内省の通達により、学習院が宮内省管轄の官立学校とされる。

※霞会館編『華族会館の百年』(筑摩書房、1975年)取載の年表をもとに、適宜補訂した。